明治三十年十一月五日發行

女鑑



第百四拾四號

東京國光社

女鑑第百四拾四號 目録

陸奥國里女



またも女子の高等教育に就きて

女子の高等教育にのみのことにはあらねど、すべて、教育には、かねて、その目的を、明に、しかと定めざるべからず、斯くて、その目的を達すべき、最、親切なる、最、善良なる方法を取りて、教育せざるべからず。やかて、誠に、よく其の目的に適ひたる正道によりて、教育しゆかざるべからず。さなくては、よく完全に、その教育を爲すものにあらず。されば、眞の教育にはあらざるなり。女子の高等教育。その目的を問はば、女子の、情緒、意思、智識、言語、行狀等を高尚優美ならしめて、やがて、高尙なる女子たらしめむものぞとは、誰も誰も、直ちに答へむずるならむ。げに、高尙優美なる女子を養成せんとするは、もとよりのことにはあれど、それにては、櫻の花を見て、たゞに花なりとのみ指したる如き

ものにて、いと、あらましの答へにて、誠に女子の高等教育の眞の目的を答へたりといふ能はず。

さては、女子の高等教育の眞の目的は、何ぞや。そは、やがて、眞の高尚優美なる日本女子を養成するにあり。眞の高尚優美なる日本女子とは、よく高尚優美なる我が國の眞誠の女子の本分を知り、よく其の本分を守りも務めも爲す女子をいふなり。

さらぞ、高尚優美なる我が國の眞誠の女子の本分とは、何ぞや。君を尊み、國を愛し、親にやさしく、兄弟に睦まじく、朋友にまめやかに、世の人に情深かるべきことは、それは、我が國の人として、男子も、女子も、一様に變はるべからざる本分にて、誰も〳〵、守るべく、務むべく、日本臣民の本分なれは、それは、もとより然るべきことにて、その上に、殊に女子の本分たる所は、一家の婦人となりて、柔和しく正しく良人に仕へ、よく固く賢く其の家を守り、その家事を整へ理め、さては、その家庭に立ちて、慈愛の露深く、教への霜かたく、よくやさ

しく正しく我が兒童を養育し行くにあり。これ、實に、我が國の女子の本分の、最、主要なる所にて、女子の義務の、最、重大なるものなり。よく此の本分を守り、よく此の義務をつとむる者は、やがて、我が國の眞誠の高尙優美なる女子たり。かゝる眞誠の日本女子を養成するが、即、女子の高等敎育の目的なり。たゞに、女子の、情緒、意思、智識、言語、行狀をして、高尙優美ならしめんとするのみにあらず。かくして、よく高尙優美なる此の日本女子の眞誠の本分を知り、よく其の本分を守りも務むべき眞誠の女子たらしめんとするなり。

女子の高等敎育の目的や、斯の如し。されば、其の敎育の方法は、この目的に、最、親切なる、最、適當せる道を取らざるべからず。

修身道德を敎ふるには、高尙優美なる我が眞誠の女子たる女德を說きも敎へ、一家の婦たる道を敎ふるには、よく賢く正しく家を守り、家事を治むべき我が家婦の本分にかなへる道を敎へ、家庭の道を敎ふるにも、よくやさしく正しく養育すべき我が家庭の母の本分にかなひたる道を敎へ、その他、學藝技術、すべて、我

が國の優美高尚なる眞誠の女子たる本分にかなひたる道をこそ敎ふべけれ。これ、最、親切なる、よく適當せる女子高等敎育の方法なり。然らずして、我が女子の本分に反せる如き修身道德學を說き立て、我が一家の婦たる本分に似ざる歐風の家事經濟を說きたて、我が家庭の母の本分に反きたる家庭の心がけを說ききかせ、さては、すべて、わが高尚優美なる女子の本分に不必要なる有害なる學藝技術を敎へさやぐは、これ、なか〳〵に、女子の高等敎育の道にあらずして、實に、女子をして、汚く、醜く、あさましく、恐ろしき魔物に墮落せしむる魔術塲裡といふべきのみ。

讀人しらず

いつはりの
なきよなりせは
いかはかり
人のことの葉
うれしからまし



論説

病中所感

坂本三七郎

吾人は、久しく病魔の襲ふ所となり、親む所のものは、枕頭數卷の書と、藥瓶とのみ。神耗して氣損し、筆硯を執るに懶ること既に三月なりき。而して、夜來萬籟寂たるの時、枕頭夢覺め心靜なる邊、彼を思ひ此を念ひ、心緒萬端感する所なきにあらず。今、其の感ずる所を書して、讀者諸孃に問はんと欲す。

文學の美なり、器品の美なり、吾人は、甚だ之を愛し、之を好む者なり。諸孃の談粧雅裝は、其の人をして品位を高からしむ。美なる者は、女子に於いて甚だ必要なりと云ふべし。文學の美、器品の美は、人をして、其の國文化の標準をトせしむべし。然れども、其の國の元氣、其の人の精神は、體なり。實なり。文學美術は、之に被らしむる佳衣の如く、麗袴の如し。而して、其の實體眞象を養ふことを勉めずして、徒らに其の外を飾り、其の邊幅を修むるに至りては、其の國は必ず亡び、其の人は必ず懦

弱に陷りて、精神茲に死せん。之が爲に、吾人は、諸孃に向ひて、問ひ、且答を求むるや切なり。

吾人は、枕頭希臘史を讀む、「スパルタ」の婦人が、國家的精神を以て、其の子女を敎育せしは、實に驚くべし。某后、嘗て外國の使臣に答へて曰く、「スパルタ」の婦女は、皆大丈夫を產むと。又戰時に臨みて、子、其の母に向て劍の短かきを訴ふ。母答へて曰く、汝の歩を進めよ。劍の短き何かあらんと。是、何等の壯語ぞ。何等の警戒ぞ。上に此の后あり。下に此の母あり。是に於いてか、「マラソン」の一戰、波斯百萬の軍を虀粉せし所以にあらずや。楯に乘りて歸らんか、屍を原頭に晒さんか。母は親子の情淚に咽ぶと雖も、忠誠國に報ゆるの兒あるを喜ぶは「スパルタ」婦人なり。是、所謂、大にして國家の元氣此に生じ、一身の精神此に於いてか活動せん。而して、希臘の亡びたる所以の者は、原因多しと雖も、一は文學美術の極盛なる時代にありき。希臘の彫刻物は、今に於いて、世界美術に傑たりと雖も、其の之を出せし時代は、瀕死の婦人が、盛粧麗服して、花陰に愁ふの狀なき能はず。豈、獨り希臘のみならんや。羅馬、埃及、皆然らざるなきなり。元氣耗し、神餒ゆ、百千の美物何ぞ益あらん。唯、其の美と元氣と、轡を駢べて進歩し、國家の盛を鳴すを期すべきのみ。

更に飜て、日本文學史を讀むに、淸少納言の如き、赤染衛門の如き、紫式部の如き、和泉式部の如き、才女輩出の時代に於いては、一枝の彤管人情の微を描き出し、世を諷し時を寫し、婉曲奇麗、巧を異にすと雖も、其の妙を同うす。眞に是、柳櫻をこきまぜて、人をして美文の春に醉はしめたり。然れども、其の錦文繡章の裡面を見れば、醜怪百出、謂ふに忍びざるものあり。況んや、王權萎靡して、藤氏權を擅にし、國家の元氣消沈耗去の時代なるをや。

明治の今日、文學の美大に發達し、才媛踵を追て輩出して、大平を皷吹す。春櫻秋楓、美を競ひ、姸を爭ふ。吾人は、彼等の著述を盡く賛する者に非ずと雖も、美文の發達賀せざるべからず。獨り今日に於いて憂ふる所の者は、文は紫女の如く、才は赤染の如きあるも、若し彼時代と、其の心事を同うせば、國家の潜勢なる家庭の教育、果して精神的の子女を養成すべきや否の疑なき能はず。「スパルタ」婦人の行、是に於いてか、此等婦人藥籠中の苦味に呈せざるを得ず。吾人は、曾て女鑑に於いて論じたりき。日本婦人の特性は、貞正温柔にして、女子の道を盡すにあり。然れども、一朝事あるに臨んでは、凜乎たること九寸五分の懷劍の如くあれど。大和撫子、豈、野に生ふる女郎花なるべけんや。故に、心に、「スパルタ」婦人と其の揆を一にして、更に花の如き

彤管を援て、明治の太平を謳歌せむ、國家の元氣、家庭の精神、玆に伸びて、錦上花を添ふるの美、敬すべく且喜ぶべし。吾人が常に望む所は、實に是に在り。唯、今日才媛の著書を讀めど、吾人の意に充たざるものあるを如何せん。病中所感の一を錄して、諸孃の一讀を望む。

女子教育一班（五十二）

三輪田眞佐子

第九章　総結

曹大家の著し丶女誡の序に、男能自謀矣吾不㆓復以爲㆒㆑憂。但傷諸女方當㆑適㆑人。而不㆓漸加㆓訓誨㆒不㆑聞㆓婦禮㆒懼失㆓容他門㆒取㆓恥宗族㆒吾今疾在㆓沈滯㆒性命無㆑常、念㆓汝曹如㆑此每用惆悵。因作㆓女誡七篇㆒願諸女各寫㆓一通㆒庶有㆑補㆓益裨㆒助汝身㆒とあり。おのれ、これを見て、うた丶同情を表しけり。

そも〳〵、學は實踐してこそ、始めてめでたきものなれ。されど、わが國、及び唐土にも、昔より書をよみし女子は少からざりしかど、實踐せしもの殆どなかりしが如し。すなはち、學藝を恃みて傲慢に流る丶女子あり。學才を利して權門に媚る女子あり。あるは、筆硯に交り、寒燈を友とするは能せんも、灑掃應對のわざに迂き婦人あり。

甚しきは、多く聖賢の書を讀みながら、操行の修まらざるものさへ少からざりしに、獨り大家は、兄なる班固の死後、その遺稿を續ぎて、前漢書を大成せし大學者なるのみならず、家にありて父母に孝なりしは更なり、出で丶良人の曹世叔に、こよなう貞なりき。一朝良人死して、子の曹穀を敎育するや、總て宜しきに適ひけり。かく、學と德と兼ね具はれるにや、芳名高く雲井にひゞきて、遂に宮中の女師とぞなされける。おもふに、か丶る女史の、赤誠をものしけるころ、千代八千世の後までも、天下の女子を感化するに足れ、若、女德の至からざる女子にして、徒ら文字を弄して、女事を蝶々せんか、などか鸚鵡猩々につきて訓言を聞くと異ならん。

わが朝の、遠くは、紫式部。近くは、紅蘭女史の如きは。その德と學とを兼ねしこと、決して大家に劣らざりき。おのれ、つねにこの流の女學者を欽仰して、意中の師となしけり。されど、駑馬は、鞭てども千里の駿足とならざる理にや、蠢々として、唯、春秋に富むを覺ゆるのみなり。蓋、年月の進むまに〱、種々の不運に逢ひしかど、露ばかりも良心に耻づることを行はざりしは、全く意中の師の賜なりけむも、猶、恨むらくは、良人を補佐せんと思ひしものを、夙に、あだし野の露と消ゑはて、四人の遺子を保育せんと謀りしものを、皆、鳥邊山の烟と立ち去りぬるを、今や、日はいよ

〱西山にかたむき、殘陽幾もなし。たま〱、黄昏月をふみて、形影相あはれむを知るもの、別に何の樂、何の望やはある。唯、天下の青年女子に、おのれの經驗と信向とを傳ふることぞ、願望なき身の樂なれ。

人誰か、その子を愛せざらむ。凡そ子のため謀ることは、必ず懇切なるべし。信に女子教育に任ずるもの、天下の女生を子の如く思はむか、片言隻語も愼むならむかし。こを以て、おのれ、この書をものするにつきても、戰々競々として、毫も經驗なきことは言はず、信向なきことは語らざりけり。若、俗に阿り、新奇を尊び、空想を衒はむか、讀者の生涯を誤らしむる罪、決して辭すべからず。故に、おのれは、おのれの言説につきては、悉く責任を負ふべし。

思ふに、わか國の女子教育は、國家主義ならざるべからざるを以て、おのれは、女子教育の大本に於いて、その主義の大要を述べけり。從ひて、良民を作るを以て肝要となすべけれど、敢て異調の女子を望まず、所謂、良妻賢母をこそ期するなれど、德育、智育なども、その目的を取りけり。なほ、體育は、日時の衣食住、及び攝身に關係するを以て、理論よりも實際を注意せしなり。又、美育は、世人の未だ多く言はざる事項なれど、更に研究せざるべからず。且、女子高等教育と、女子の學制は、時勢に伴ひ

て移動あるへきものぞかし。本書を繙くもの、その心してよ。されど、經驗は挾隘に失し。信向は頑迷に流れ易きものなれど、多少諸家の說をも參考せしかど、讀者に幾分の裨益を與ふるを得んか、幸になむ。

（完）



陸奥國里女が事

豐井ふく子

みちのくにありといふなる名取川、なき名はとらでいみじき孝貞の名をとりたるめでたき女こそあれ。その名を里と呼びて、陸奥國、名取郡、南方、下増田村の百姓長兵衛が養子庄兵衛と云ふものゝ、妻女にて、寛保のむかしのものなり。里女、庄兵衛にとつぎしは、享保元年にて、夫は、そのむかし、正德五年に、長兵衛が養子となれるにて、持高も四十石あまりの百姓の身の、田の事、畠のことにいといそがしく、起臥つゆ家を省るのいとまはあらざりけり。

里女、此處にとつぎ來りしは、年やう〳〵二七の花の少女、殊に田舍にはあれど、さのみ貧しからぬ家の娘、あそぶ友達にさそはれ、野邊の霞に交じりて、おのれ胡蝶とあこがれても耻かしからぬ年浪にはあれど、里女は、たゞ三春を、行樂の期とのみ思はず、また、よくつとめ、學び、とつぎしよりは、偏に夫の留守を引きうけて、舅にかしこみつかへ、姑にやさしうかしづき、奴婢をいたはり助けて、共に内事を怠らず。年は三五には及ばざれど、行ひはつゆかけし所も見えざりけり。されど、姑は、もと、子と云ふものをもちしことなければ、物のあはれを知らざるが上に、かねて、巳れの姪なるものを養ひ、ゆく〳〵は庄兵衛か妻にせましと思へりしを、長兵衛きゝ入れずして、此の里女を娶らせたるなれば、姑はこれをふくみて、折にふれ、物につけ、いと慈愛なく、よろづ氣むづかしうふるまひ、知らぬ恨みを里女にかまへて、まがりしてともなきくれ竹のふしもれもしろからずながめ、聞えぬ事のみ求げりぬれど、里女はうきふしとも見ず、いよ〳〵いさぎよくかしづき、蚊遣火の下くすぶるふるまひも、むせぶ心つゆ見せず、たゞ心のどかに、巳れを省みて、かげしをれぎなひ、いつもまどかにいつきかしづきて、久しき年月、悲しきつゆ時雨のいろは、小夜の枕にも洩らしたる事かつてなかりけり。

さるほどに、長兵衛は、凡てのことをはかり知りて、今はたゞ世を養子にゆづり、その身夫妻は別に家を造り、隠居するに如かずと思ひ、此のこと語らへど、庄兵衛夫婦固く辭したりしかど、舅はひたすら親族等にもはかりて、遂に本意のごとく別家したり。里女は、心すまねど、是非なければ、それより朝夕のとひとぶらひをはじめ、飯菜は云ふに及ばず、水までもみづから汲みはこびて、絶えざるやうになし、薪も一本づゝ撰びて、木のよくもえていぶり少きを送るやうになせど、姑は、なほ心によろこびずや、うれしき面ばかりも見せざりけり。されど、里女はうらみともせず、いよく のどかにたちまふほどに、長兵衛、享保十四年、病にかゝり空しくなり。姑はまもなく中風の病にかゝり、手足わなゝき、言語さへわかりがたきに、里女はいたくうれひ、神佛に祈り、藥用、介抱、ある限りを盡くしゝ甲斐ありてか、一年ばかりはやゝ愈しが、その後また再び打ちかへしぬるに、里女たゞ側に侍して、朝夕の飲食、茶煙艸の類まで、手をそへ、心をこめ、いたはり助けたり。また、姑、若きより、桃、梨、柿の類をいたく好みて、屋敷の内にも多く植ゑおきたれば、里女、かの木々の花の盛りにはいつも下陰に筵をまうけ、姑を肩に引きかけ、伴ひ行きて、茶菓の類、好むを撰びて供しなぐさめ、早くその實の成る時をまちて、また例の如く具し行きて、その實のよ

ろしきを撰びとりてすゝめ、ひねもす快く樂しましめ、夕になりては、秋霧もふかく、病も重らむとて、早く湯をわかしたきて、洗ひあたためぬ。病つのる折り、寒き日などは、小夜深く、つらゝとぢて動かぬ車井をも物ともせず、自ら水汲みて、忽ち湯をわかしてあたゝめ、枕元には火箱おき、足の方には巨燵して、なほ心に病のつのらぬを祈り、また、暑き時は、夜晝となく側にありて扇つかひ、くるしきねざめ少なきやうにと祈りぬ。折りしも其娘の十五歳になれるが、疱瘡にてみまかりしを、里女なげきかなしむまも、なほ姑を省ることと例の如く、己が身を忘れ、子を忘れても、姑を心にかけぬ時は、夢のまもなかりけり。

殊に、此の姑は、日來いたく汚きをいとひて、潔きことを好みしが、病つのりては、大便も一日に十七八度、もしくぞ二十四五度、三十度にも及べど、里女すぐにぬぐひ去りて、汚れたるふしを云だしもとゞめず、臭氣なきやうになして、かつていとふ色を見せしことなく、その手足の心にまかせぬつらさをくみ悲しみて、せめてもの心やりにとて、一日に二三度づゝ、已が肩にかけて、座敷の中を伴ひありくに、折り〳〵はあやまちて、汚れたるもの落すあるも、少しもいとはず、あつかひ清め、病いよ〳〵重りては、里女みづからその汚きものをひねり試みて、油氣のある時はよろこび、な

き折りは悲しみ、又はそのかをりをかぎて、臭氣のつよき折りは、熱氣のつよからんとていたくうれひ、醫師にもくはしく語りけるは、かのもろこしにて、父のいばりをなめ試みし子がためしにも通ひて、古今、異國、孝子が心は同一なりけり。

かゝる中にも飲食の供へ、うみつむぎのわざ、農業のつとめ、また怠らず、屋敷園の中に、田地七反ばかりありけるは、里女一人にて耕し、天うらゝかに、風もおだやかなる日は、畑の際に、莚を引きて姑を座せしめ、茶菓を供し、其身は鍬をとりて、すきかへす間も、始終姑の方に心をくばりけり。

かくすること五年、たゞ一日の如く介抱に介抱しつくせど、枯木ふたゝびさかえず、遂に寛保二年春三月、もとの根にとかへりたる最期いと清く、身體、衣服つゆ汚れたるふしなかりしを見ても、その用ゐし心いかばかりぞや。げに世の常の嫁が介抱ならむには、もとより朽木の、如何で去年の嵐に仆れざらむ。肥やしかへたる孝女が赤心のありたればこそ、霜雪をも凌ぎて、今年の春風にもあたりしを、孝女が心にはなほあかず、水飲口にいらぬばかりにむせび悲しみ、凡て、亡き人の位牌をば、程なく菩提寺に送くる習ひなるを、孝女は、せめて、今はそれをだにとゞめまほしさに、四十九日過ぐるまでも寺に送らず、持佛堂にかゝげおきて、朝夕怠らず、香花を手向け、孝

の全からざりしを訴へ謝しけり。夫、庄兵衞もいとまなき身ながら、夕べ〳〵かへりては持佛堂に燈火かゝげなどして、先きに臥するを、妻女は飲食のものとり收め、子たちをも臥さしめ、後また持佛堂に入り、位牌に向ひて、えむし涙を注ぎけりとぞ。其の孝行、四方にかくれなく、やがて領主にもきこえければ、いたく感賞せられ、里女が身を終るまで、年々に米若干を與へられて、その國人のかゞみとせられしを、遠きみちのくの物語とのみなしはてむことの、いとをしさに、此處にまたかゝげて、廣く世の嫁鑑となさまほしさにかくなむ。

貞歌

薫風仙史

筑前の國博多の人伊藤小左衞門といへるは、身富みてゆたかに暮せりしかど、長崎にも別莊をたてゝ、一年が内、半ばこゝにて日を送れり。このごろ貞歌は丸山といふところの娼なりしが、小左衞門若干の金を出して其の身の代をつくなひて、これが妾とせりき。其の後小左衞門は長崎の人なにの吉三郎といへるに誘はれて、船にのりて洋中に出でゝ、外國船と交易をなせりしが、時徳川幕府のころにて交易は國禁なりしかど、この事覺はれて、まづ吉三郎とらはれて、磔の刑におひて死にき。小左衞門もれなし

き罪にれきてせられて立髪村といふろ處にて傑せられき。貞歌、小左衛門が罪せられて死にきと聞きてかなしむ事かぎりなく、三日ばかりありて人にいひけらく、かの立髪村といふなる所にゆきて、一度良人小左衛門がみうせぬるさまを見ばやとて、やがて二人のとも人をつれてそこに至れり。見れば地海のほとりにて、絶壁けづれるが如くにして、高さ七丈にもあまれり。貞歌しはしその屍をふしをがみてありしが、たちあがりてもなほこゝをはなれがてに見ゐしが、忽この高き岸の上より身を倒になげてれちてうせにき。とも人ども驚きてれそる〳〵瞰下せば、はや身きれ〳〵にくだけて死たりけり。きく人みなその義烈に感じあへりけりしといふ。貞歌、身いやしき娼にてありしながら、心だてかたく義烈かくの如し。身良家に生れながら心ばせいやしくしてかゝる娼にも劣れるもあめるはなげくべきなり。





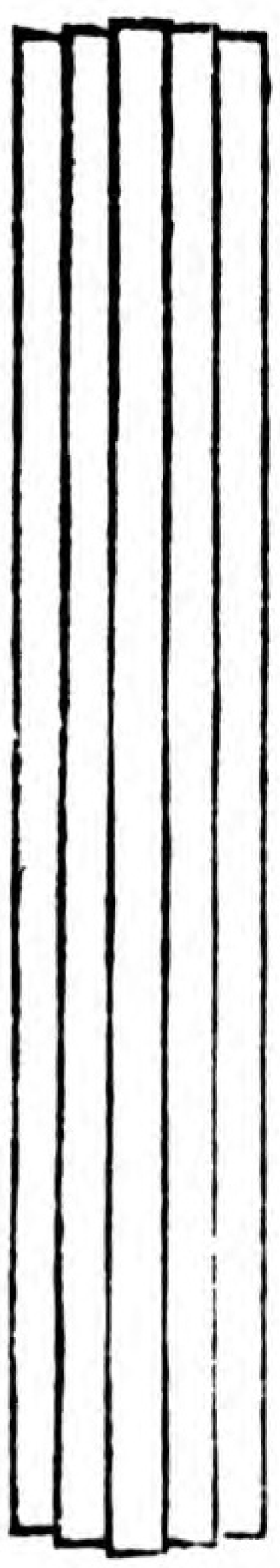
家政

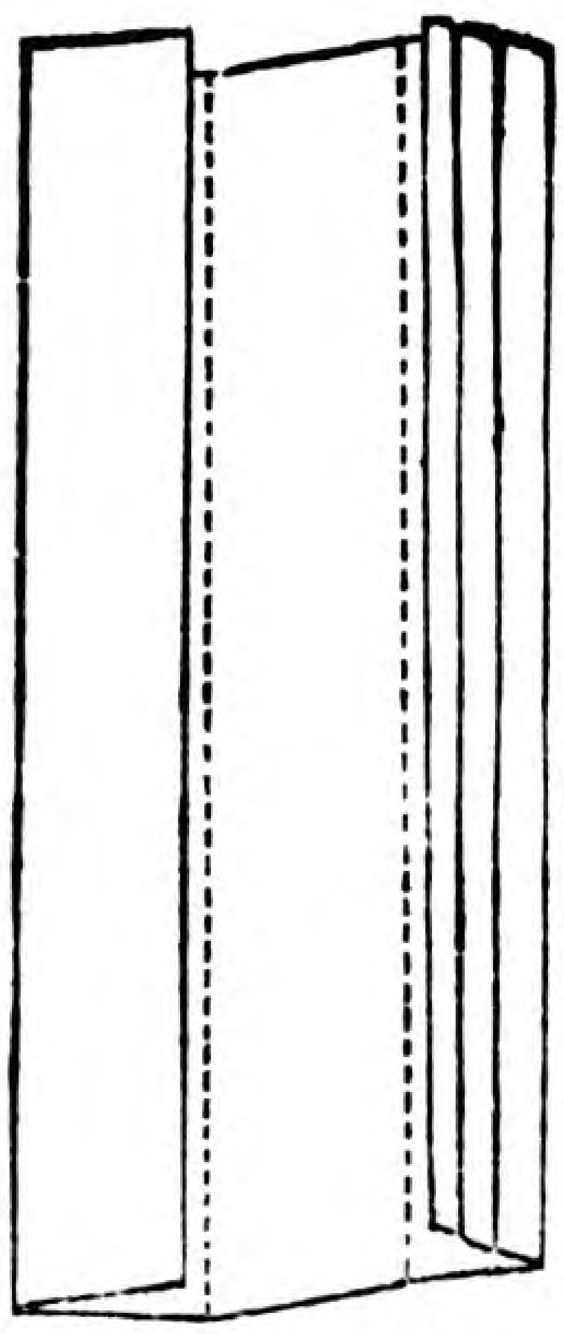
折形

有住齊

掛物(かけ字・かけ絵類)包

上書あり、水引かけ(掛絵・掛字)とかくべし。

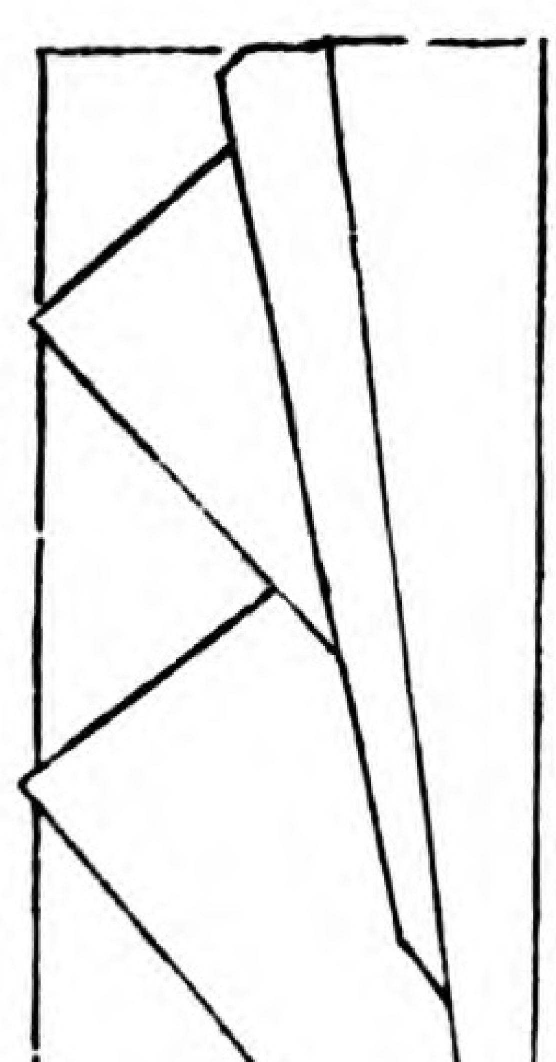




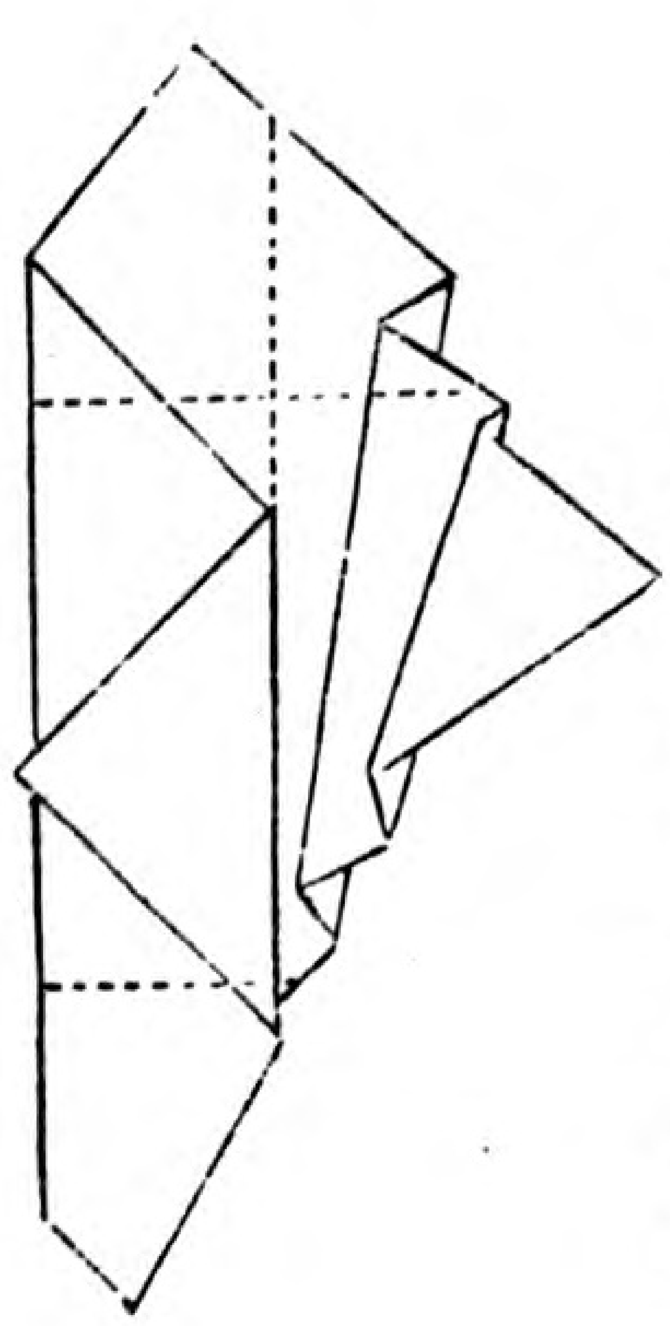
おなじく開きたる圖　右の方に在る點線は、右に向けて折りたる跡を示し。左の方に在る點線は、左に向けて折りたる跡を示せるなり。

頭巾綿帽子包

綿帽子書附あり。



おなじく、上下と右とを開きたる處斯の如し。



茶の湯

孤峰庵不美

關　葦雄

炭手前　炭斗へ炭其他仕組様

先炭を直さんと思ふには、炭取の炭を組（但しくむと云は茶の習にて炭取の中へ、胴炭、管炭、毬打、輪胴、枝炭の五種を見繕入るを云、胴炭は横竪共に一個に限る、胴を組は輪胴を不組、輪胴を組は胴を不組、何れにても一方なるべし、管は二三本割たるも交ろ、毬打は四五個是も割りたるも交る枝炭四五本入べし、各種類炭の大小さ、炭斗の蓋深浅、火の流れ加減を見斗酌量すべし）炭斗の中、左の方に胴炭を入。（但竪に以下の炭も做之）其の右へ管炭を入。又其の右へ毬打を入。横胴を不組時は、毬打の前の處へ竪輪炭を入べし。次に毬打の向の處へ、風炉は炭に不掛樣にして枝炭を入べし。次に火箸を先の方は炭斗の中へ落し入、本の方は（手取邊は）炭斗の前の縁へ持せ掛へし。次に羽箒（茶道にては是を三ツ羽と云）を炭斗の向前の縁左の方へ掛置べし。次に釜敷を入、釜を載る方を下に、疊にすれる方を上に成樣に置べし、（但竹の皮の組物にても藤組にても）次に香合、是は炭斗の中を見斗ひ、取能所に置べし。次に灰炮録、是は（但分量は灰器の大小に依りて見斗有へし）灰匙は仰向て成丈け細抹の灰を入、灰の中へ入べし。是にて炭手前の用具、炭の組方終る、何れも水屋の棚に上げ置べし。

炭手前手續

先炭を直さんと思ふ時は、帛紗を腰に狭むべし。（但狭方は濃茶手前の時の如し）次に稽古の上にては、宗匠に對し一禮を爲すべし。扨、炭取持方は、左右の手にて炭斗の兩脇の胴中を、手の指を等しく延し、縁の方へ拇指の出ざる樣に、篤と持、腕を延し向へ差出し、兩手の間より足元を見、靜に右足より歩行出、敷居の上も、右の足より踏越へ、道具疊へ入も、同じく右足より踏入時、右の方に寄踏入、風炉の置場を見斗、足を踏揃へ、据りて風炉と炭取を並べ、左右は風炉を除き、疊の眞中、向前は環付を見て方正に置合、左右の手を膝に取、足を爪立一束に立て、右足、左足、右足と、三足引廻り、水屋へ入、灰炮録を右手に持、左手を下に添、出て道具疊に右足を踏入、左足を踏入

時風炉の方へ寄、風炉小板の前を五六寸明けて座し、左の膝を僅少跡へ引て、後ろの方道具疊の左の隅に、灰匙の柄我方へ向樣に置付、又左の膝を前に出し、左右の手を膝の上に置、居前を能調へ、體氣一息して後、右手にて羽箒を炭取の左の方の側に卸し、火箸を取、羽箒の直左の方に置、香合を同じく右手にて取、左手の掌中に一旦受て、右手を持直し、右手にて左の膝頭と風炉小板の角との間眞中に置、（但し縁の方は疊目三つ除く）直に右手にて釜の鐶を取、左手に控へ、（但し鐶の合目重りに差遣なき樣に左手の惣の指先にて持鐶の合目は前の方に成る樣にもつべし）則ち左手膝の上に控へ、（但し扣方は鐶上に成樣に甲の方膝上にあたる樣にすべし）次に右手にて釜の蓋を締切、左手を拇指と名刺指を上に見る樣にして、右手にて鐶の兩の指の間を一束に持、左手を放し、同く拇指、名刺指にて鐶の左の輪を持、左右の指先にて二つに劃、右手に持たる鐶を、釜の鉉付の向より掛、

續て左手に持たる左の鉉は、釜の鉉付の前より掛て、僅少向前へ廻し、鐶は其儘上げ置、手を放し、右手にて炭斗の中に有之釜敷を取、釜付の方より返し、左手を添、右手にて持直し、炭斗の前の方に置付、直に左右の手にて鉉を持、釜を上げ、釜敷の上に置付、又鐶を上げ置、手を膝上に取、一と膝右へ開き、（但し開くに口傳有左膝を右膝寄付密着し右膝を右へ開けは眞直の筋違になる）又鐶を持、釜を下座の方に引付（炭斗の間七八寸明け付る樣にすへし）鉉を向と前へ廻し返し、鉉を逬して左右共に合重ね、右の手にて釜の鉉付を眼當に置合すべし、（但しいつも合目前と心得へし）次に又膝を右膝を左へ合せ、左の膝を左へ開き、右手にて羽箒を取、（但し羽箒の柄竹の皮にて卷たる處を淺く持）左手を掛て、右手にて篤と持、羽箒の羽の廣き方にて風炉の縁の右の方を前の方へ掃廻し、向を左の方へ掃廻し、縁の端にて掃留、改めてを外より中へ掃込、前の灑口は、左右中と掃、（但し中は風爐の中

へ摺込む心持たるべし、左手を添、羽箒を淺く持、炭斗と釜との間に筋違に置べし。

（以下次號）

女の禮

禮節教授　有住常子

多人數一同の禮

一學校の教場にて大祭日に聖影を拜み奉る時、又教場にて惣ての生徒の教師を敬ひてなす時にも用ふる禮なり。

一通常の家にて、貴人を共に出て拜するに用ふる禮なり。

こゝには、通常の方をのせ侍るべし。

稽古の仕樣

まづ五六人にても二三人にても、一行に並て正しう居て、兩手を膝の上に指の間のはなれぬ樣に心しておきて、兩膝頭にそと力をいれて爪立たまひて、次に右の膝がしらを、半もたげて、左の膝頭を疊の上を摺しながら、右膝と共に、右の方に披き（是は立よからんために足の樣をなほし侍る事にこそ）さて眞直に向て立なり、貴人御右の座におはす時、一行になれる、右の端の人一番に出る、次の人は、其一番の人の居りたりし所に立樣に、左の足を右の足の爪先にかゝぶらせて、右も左の樣にならべて、左足よりあゆみて、一番の人の後に進み、右の足を左の足にかふらせて、一番の人の行く如くすこし足はやに、三尺ほどの間をおく樣に、共に進み出たまふべし、三番四番次々の人も、是にならひてよかし。しかして、一番の人、貴人の御前に至らむ、左の足を、右の足にかふらせて、御前に向ひて、左の足を

半足、右足よりあとにひきて、左膝をつき、右もつき侍りて、右左引合せ侍る事は前の條（禮座）に記しおきつる樣にして、御禮申上侍るべし。

さて侍る樣は、もとも後に出たる人より立歸り侍るなり、まづ御禮すみて、右左右引合ながら爪立て、右の膝をながら浮し（是時右の足左より後の方にさげたるべし、）右に披き侍る樣橫になるまで披きて、右の足より立て、踏そろへて、左足よりすゝみてかへり侍るべし。

○御左座におはす時は、左の方の人一番に出て進みゆくなり、まづ爪立左の膝をもたげ左に披きて、ますぐにたちて進みゆき、右の足を、左の足にかふらせて、左座にむき侍りて、引合て、御禮申上侍るなり、つぎ〳〵の人、皆おなじ樣なり。

立歸り侍るときは下座の人、右左と引合侍りて、左に披きめぐりて、左の足よりたちて、立かへり侍るべし。

さてはじめ居たりし所に至りて、一番に立歸る人（出る時の一番の居たりし所までいたりて）

○右座の時には、左足を右の足の爪先にかふらせて橫にむきて、しづかに本の座にいたり、左足をまたかぶらせて、右の足とそろへ侍りて左の足を半足ひきて、さて居り侍るなり。

○左座の時には、右の足を左の足の爪先にかぶらせて橫にむきて、本の座にいたりて、また右足をかぶらせて、左の足とそろへ、左の足を半足ひきて居り侍るべし。

すべてこの禮の樣は手易きやうれもはるれど、よく〳〵ならはざれなしがたきことにこそ。

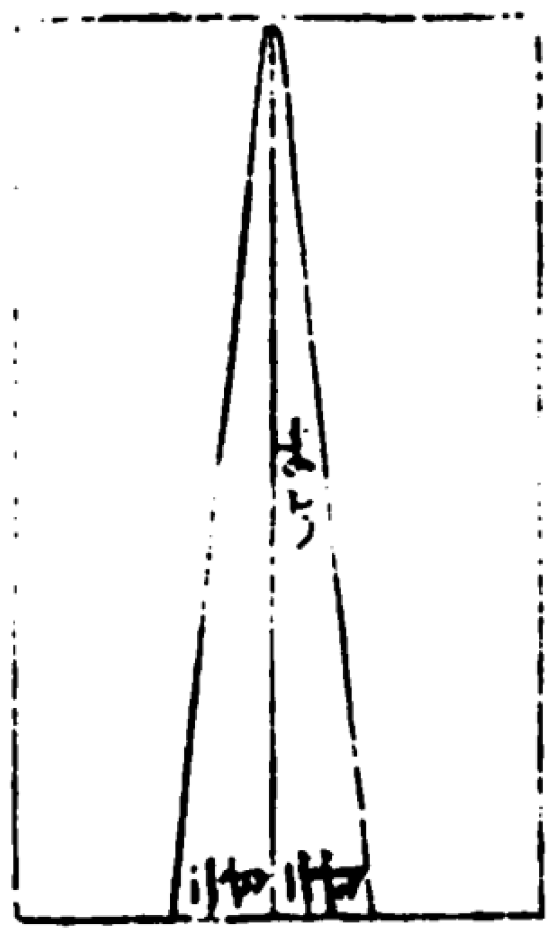
正誤

第百四十三號家政の女鑑二十八頁の上の段二行目の初づまはまづの誤。仝じく二十八頁下の段十行目蹄は襟の誤。仝じぐ二十九頁下の段一行目の終たぶべしはたまふべしの誤

たちぬひ

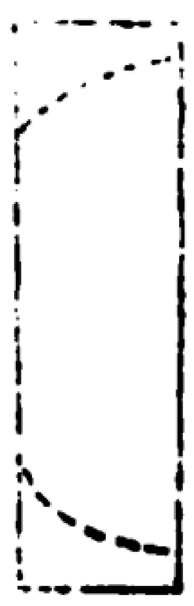
西山たい子

前回のシャツの袖のたち方書があやまりたれど此處に更め置くなり。

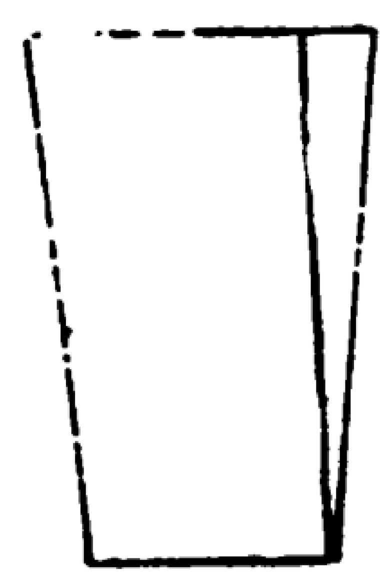


（七九）その縫ひ方

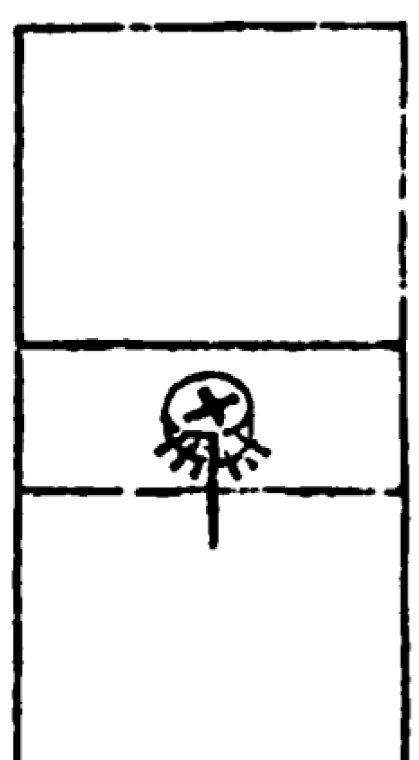
まづ袖口に截ちたる切れをとりて、縦に眞二つに折り⊙



⊙圖の如く兩がはをぬひひきかへしれき、さて、袖をとり、⊙

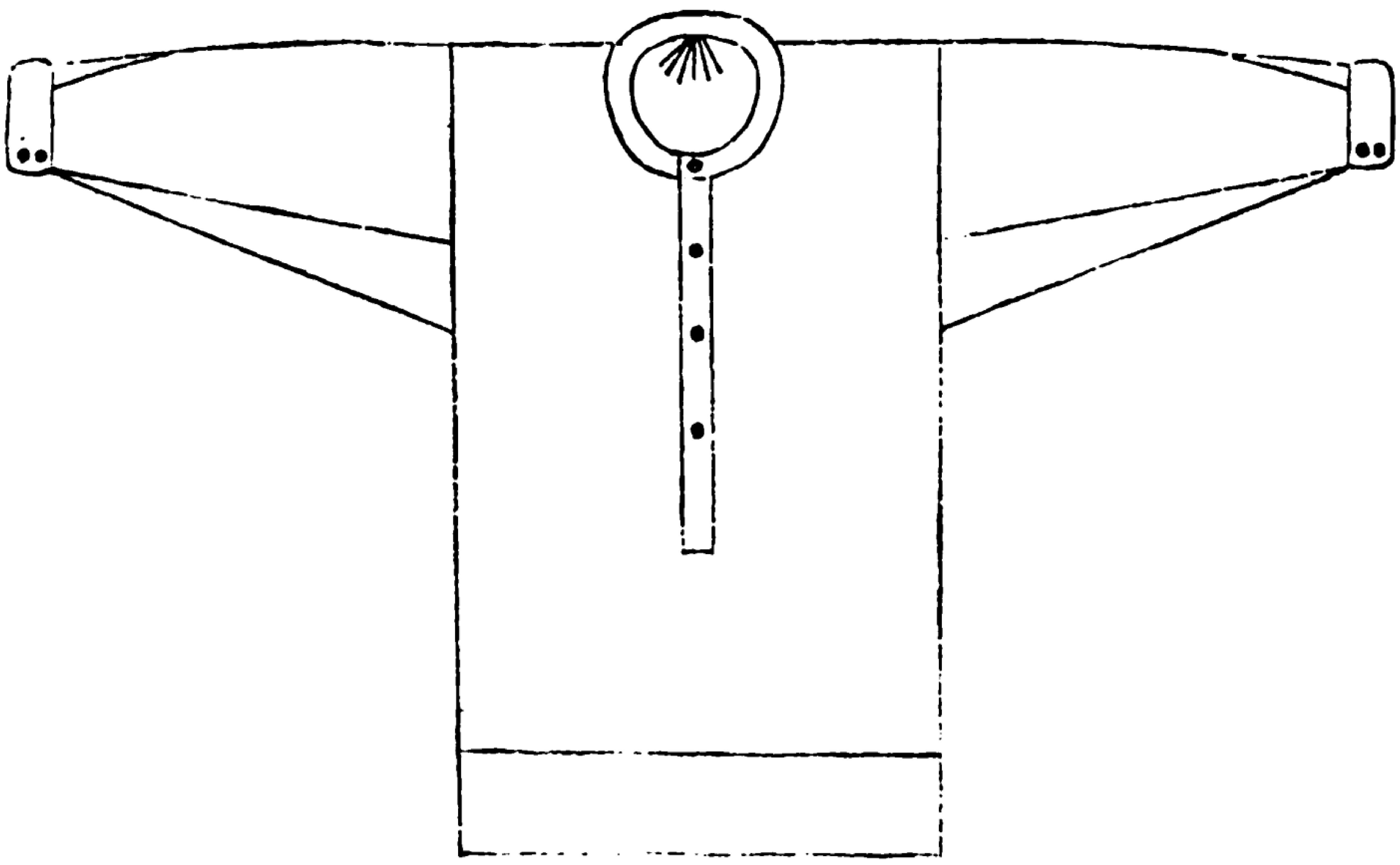


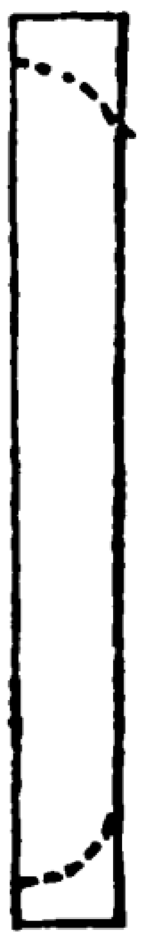
⊙圖の如くかゝざるものゝ方へ、襠の切れをはぎつけ、二つに折りて、斜なる處を袖口の方二寸ばかりあけて、斜にまつすぐにぬひ、その口を、袖口にあはせて、長さだけを眞中にてひだをとり、袖口の表の方をぬひつけ、裏の方にて絎け、その袖口のうしろの方に、横に穴を二つあけてかゞり、前の方にボタンをつくるなり。但し、襠をつけたる方を前とするなり。それより、身衣をとりて、兩脇をぬひ、上まへの方の表に、縦襟のふち折りて絎けつけ、肩あてをも横のふちを折りて、⊙



⊙圖の如くして、表がはにくけつけ、襟まはりをそろへてたつべし。さて、ゑりのきれをとりて縦に二つに折り、そのはしを

その縫上りの圖





圖の如くぬひてかへし、表の方へぬひつけ、裏にてくけつけ、上前の方に穴をあけてかゞり、下前の方に、ボタンつけ、それより袖をつけるべし。之はすべてミシンにてぬふを日本流に縫なふれど、絎け所もなるべく、細かにすべし。

造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

葡萄

熟したる實の造り方　先づ、造花原料賣販店（東京にては日本橋區横山町一丁目十二番地前川善三郎にて販賣す）にて、之に用ゐる硝子球を買ひ求め置き、別に、針金に薄美濃紙を卷き、之を「カシトラバル」にて濃く染め、乾きて后、前の硝子球の穴に差し込

み、糊にて固く止め、此の球を、火にて能く温めて、直ぐに「ピオレット」と「マセンダ」とを等分に薄糊にて溶きたる中に突き込みて染むべし。

熟せざる實の造り方、總て前と同じ樣の仕方にて、只、「ピオレット」と「マセンダ」との代りに「グリン」三分「オウラミ」七分を溶きて染むれば、青き熟せざるものを得べし。

以上、熟したるも、熟せざるも、造り上りて后、粉白粉を乾きたる筆にて塗り、少しく白味を付くべし。

纏め方は、唯、實物の通りに、恰好よく造ればよし。まとめの紙は、薄美濃紙を「カントラバル」にて染めたるを用ふべし。

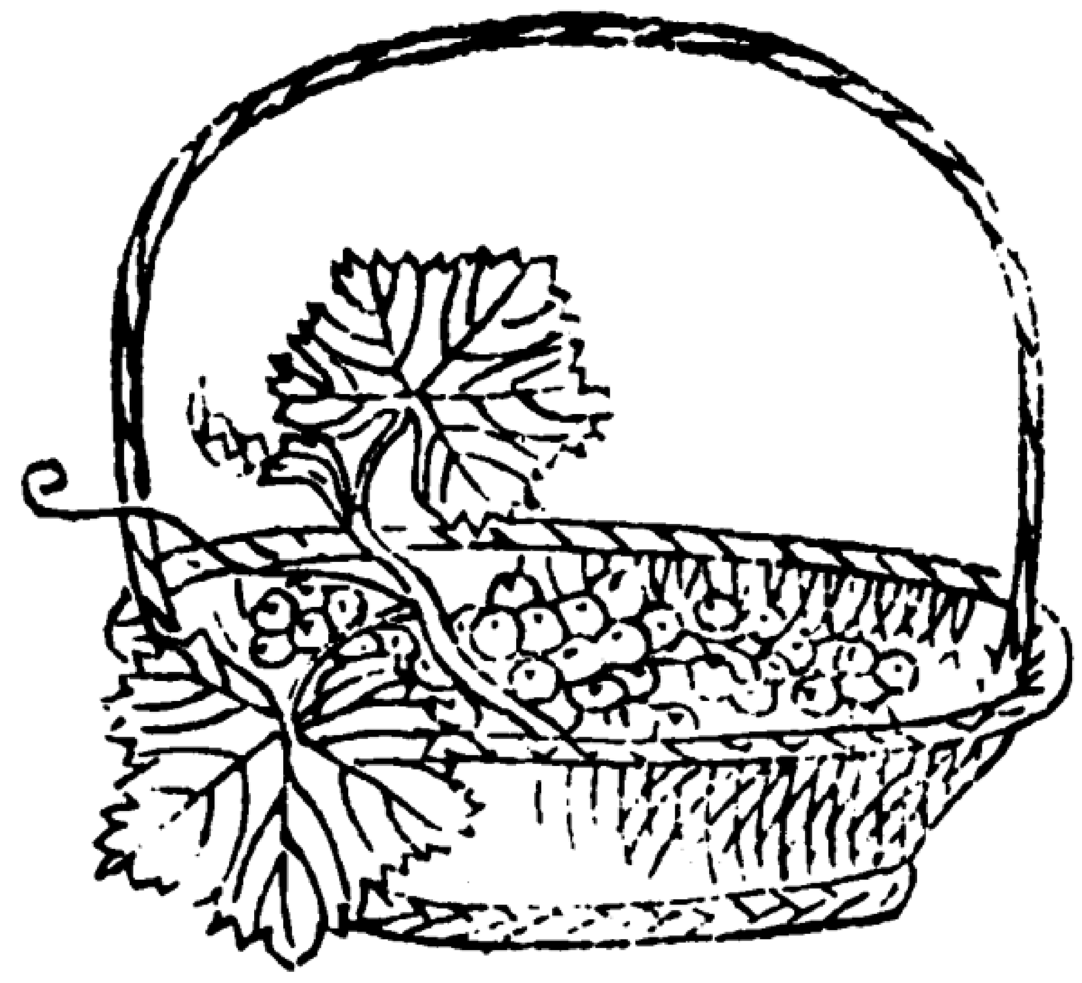
葉の造り方　寒冷紗を、普通の葉色に、「オウラミ」七分「グリン」一分五厘「マセンダ」五厘を合せ、尚、色褪せざる爲に、生明礬(分量は繪の具の五倍)を入れて染め、乾して后、實物に合せて其の形に斷ち、針金に青紙を巻きて裏より着けて葉の莖となし、筋鏝にて葉の筋を施し、筋の間々は、裏より瓣鏝にて少しくふくらますなり。

芽葉の造り方　芽葉も、實物に合して形を取り、前の如くそめたる后、「マセンダ」にて染めて少しく赤味を帶びしめ、之を布の間に挾み左の掌に敷きて右の手にて其の端を内部に引き絞りて縮らみを附け尚、筋鏝にて筋を入るべし。

以上兩種の葉共に、蠟にて光澤を着くべし。蠟にて光澤を着くるときは、先づ「ニス」と「パラピン」とを全量に合せ火にかけて能く溶し。之に葉を突き込み直ちに取り上げ、紙の筒の中にて廻して能くしたゝりを取り乾すなり。若し「ニス」「パラピン」無き場合には、蠟に種油少しを加へ火にて溶きたるものにて

もよし。（第百十圖參照）

第百十圖



南天

實の造り方　小さき眞鍮の針金を二寸五分ばかりの長さに断ち、其の先に糊をつけて細かく刻みたる綿を巻きつけて、實の太さに恰好能く造り、別に薄糊を解き、其の中に「スカレット」を没じて能く掻き混せ、此の中に前に造りたる實を入れ右の手に力を入れて實の崩れざる樣に能く色染し、乾して后、「ニス」、「パラピン」にて葡萄の葉と仝じ樣に光澤をつく。實の頭の小さき點は墨にて施すべし。纏め方は、實物に合してよき樣にすべし。紙は靑紙に「マセンダ」を引きて薄赤くしたるものを用ふべし。

葉の造り方　葉は寒冷紗にて前の葡萄の葉と仝じ樣

第百十一圖



にいろぞめし、形に斷ちて適宜に纏め造る。
芽葉は前の如くそめたる上を「コンゴレツト」を薄く溶きて染むべし。鏝は筋鏝を用ひて實物によりて筋を施すべし。
以上造りたる實の總子、葉などを纏めて、枝を造るには中に竹の削りたるを入れ上を「カシトラパル」にて染めたる紙にて卷きつくる也、第百十一圖參照

だいどころ

鷄兒「パイ」　二羽の鷄兒を拵へ、能程にきり、鷄兒「シチウ」に入れる如き野菜を加へて、胡椒、食鹽を和し、「パイ」皿の底に肉を列べ、其上に腿火の薄片を載せ、又其上に肉を重ね、皿に滿るまで斯く爲すこと數回の後、其隙間に能く煠でたる鷄卵の蛋黃を塡め、其上に味付たる肉を置き、少量の犢のゲレーを注ぎ、前に示したる如き捏粉にて覆ひ、凡そ一時間半程燒べし。
「タート」の外皮となすべき捏粉は、「パイ」の捏粉と違ひ、二三の混物を要す、先づ、米利堅粉一斤を塊りなきやうに、捏鉢の中にて能くこなし、牛酪四十目を投れ、よく擦り交ぜ、麵包粉の如くなりたる時、鷄卵の蛋黃一つと、白砂糖十五匁を能くかきまぜ、捏粉の中央をくぼめて、此處に投、能程のレモン汁と、冷水を注ぎ、能く捏たる後、延板に少しの粉をまきて、其上にとり、初め手にて延し、夫より麵棒をかけて、「パイ」の捏粉より薄く延し、「パイ」皿の大きさにきり置べし。
林檎「タート」　七八個の林檎の皮を剝き、心を去り、一個を四片、又は八片にきり、之れを「パイ」皿に投

れ、六十匁の白砂糖と、少量の丁子桂子、又はレモン皮のおろしたるを加へ、水少しを注ぎ、前に示し置たる揑粉にて覆ひ、其蓋の兩端に孔をあけ、林檎の煮ゆる時、其熱度を洩さしむるやうになして、凡そ一時間程焼べし。

馬鈴薯「パイ」　之れは、薯を揑粉の代りに用ふるなり。先づ、半斤の薯の皮を剝ぎ、之れを煠て、能くつき砕きて裏漉にてこし置き、牛肉「パイ」を製すると同様混和物を加へ、一斤の牛肉を「パイ」皿に投れ、前の薯にて皿を覆ひ、焼くこと凡一時間半を用ふべし。之を食する時、少量の熱湯を注ぐを佳しとす。





學園

秀歌集（九）

鹽井正男

君が植ゑし一むら薄虫の音の
しげき野べとも成りにけるかな

○此の歌は、古今集の哀傷部にありて、みはるのありすけといふ人のよめるものなり。秋の夕、亡き藤原の利基が、昔住みたる曹司のあとを見るに、今は人も住まずなりて、もとありし前栽の、いと茂く荒れたりけるさまを見て、いとゞ昔の思ひ忍ばれて、ありすけがよめるなり。○君が植ゑし。君が植ゑ置きたるといふことにて君とは利基をさ

せるなり。○一むら薄。一叢の薄といふことなり。○成りにけるかな。成つたワイと歎息せる詞なり。○しげき野べ。薄も茂り虫の鳴く音もしげくなりたるなり。しげき野べとものもは、俗にマアーといふ如き輕き歎息の詞なり。

○一首の意は、君が植ゑ置きたる一むらの薄が、今は茂りに茂りて、庭は、虫の鳴く音もしげき野べと、マアー成つたワイ、さても〳〵あはれやと、人も亡くなりて荒れたるあとを歎きたるにて、言外に昔を忍ぶ限りなき感情をこめて、餘韻いふべかりなく、露のはら〳〵と、よむ袖にふりかゝる心地もすなり。

○

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
　我が身一つはもとの身にして

○これは、古今集の戀部にありて、業平朝臣のよめる有名の歌なり。去年まで親しうかたらへる人の、いつしかよそにゆきて見えずなりたるを、梅の花ざかりに月の面白かりける夜、いとゞ去年のことの戀ひしさにたへずして、ありつる家に至りて、月の傾くまでも、ひとりながめ〳〵て、なげきよめるうたなり。○月やあらぬ。「月や昔の月にあらぬ」といふべきを、畧して、かくいへるにて「月は昔のまゝの月にあらぬや、昔のまゝの月なり」といふ意なり。「月や」のやは、やはと全じくして、所謂反語といふものなり。○春や昔の春ならぬ。「春の景色は昔のまゝの春のけしきにあらぬや、昔のまゝの春のけしきなり」といふ意なり。春やのやは、月やのやと全じ詞づかひなり。○もとの身にして。「もとのまゝの身にありながら」と

いふことにて、此の下に「さるに去年のゆかしき人にあふを得ずして、去年のやうにもあらぬことかな」といふ如き意を加へて見るべし。

○一首の意は、今宵の月は、昔の月のまゝの月にあらぬや、昔のまゝの月なり。春のけしきも、昔のまゝの春のけしきならずや、昔のまゝの春のけしきなり。月も、げに、去年のまゝの月なり、春のけしきも去年のまゝの春のけしきなり。さるに、我が身一つばかりは、もとのまゝにてありながら、去年のゆかしき人にはあふを得ずして、去年のやうにもあらぬことかなと、去年のまゝなる花月の春夜に、わが戀ひしも人のみあらぬを歎きたるなり。此の歌、前に云へる如く、言外に多かる心を餘したる故に、古より、心あまりまりて詞たらぬよしなど評せれど、感情かぎりなく深く、餘韻いふばかりなくあはれなり。

○

年を經て住みこし里を出でていなば
いとゞ深草野とやなりなむ

○これも、業平朝臣の歌にて、古今集の雜部にあり。業平が、久しく深草の里に住みたるが、そこを出でて、京へ行くとて、そこの人によみて遣したる歌なり。○住みこし里。住み來りたる里といふことなり。○いとゞ深草。深草の里は、いよいよ草深く荒れはてゝといふことなり。○年を經て。久しき年間を云ふ。

○一首の意は、久しき年の間、住み來たりたる此の里を、出でて行つたならむ、此の深草の里は、いよ〳〵草深くなりて、野原とや成りはつることならむといへるにて、我れ此の里を出でゆかむ、貴

方さまは、全く我が身を忘れはてたまふこととならむといふ意を、かく面白く云へるにて、詞も調も、何となうやさしく風情こもれる歌にこそ。
かく業平のいへるをきゝて、その人

野とならば鶉と鳴きて年は經む
かりにだにやは君は來ざらむ

と返へしたり。
その意は、野と成りましたならば、私は鶉と成りて、ないて月日を暮らしましよう。かりになりとも、貴方さまは、來たり給はざらんや、來たり給ふであらう。さすれば、そのかりの訪づれをば、せめて樂みに待ちてあらむと思ひますが、貴方さまは、もはや、かりにも來たまはぬ御心にてかといへるにて、かりといふ詞に、かりそめの意と、鶉を狩るといふこととは引きかけたり。業平が「野とならむ」といへるは、彼方の心のかはりはづべきをうらめるなるを、此方は、その「野とならむ」といへるを取り來りて、かくうらみかへしたる手振り、誠に面白く上手なるのみならず、心に詞に、やさしき女子のふし見えて、あはれにゆかしや。

ふゝくろ　第四稿

下田義天類評論

第七

原文縣居翁の作

承りぬ。御いそぎの歌直してまゐる。三河へ行く人のはなむけにと云ふ題賜はりしよし。これには三河の名所をもて詠み給へ。
八はし。をかすがのわたり。
衣のさと。さなぎの里。山神もあり。

二見の道。是は萬葉の二巻にあり。
矢はぎの里。豊川。
石巻山。岩にて神もあり。

其の外、いらごが崎。三河の崎なども詠みてよし。其の名所をことばにて別を惜み、往く先に在らむ事をも云ふべし。但、うまのはなむけと云ふ事は、旅立つ可き人を呼びて、酒など饗するを云ひて、今別るゝ朝をいふにはあらず。去がし、かねてわかれの惜き心を云ふはよし。今別るゝやうにはよむべからず。右の題に、三河へ行く人にはなむけにとては少し違ふやうなり。三河へ行く人にうまの鼻向する時によめるとやうに有るべきなり。俗に、別るゝ人に物れくるを、はなむけといふはわろし。

過にし日の御歌ども、さきに御女中に遣し候。冠辭考も出來候まゝ四部遣し候。代は壹部にて貳拾五匁つゝなり。

第八

御示の事、御いたはりよろしくれはするを承り悦びぬ。此の程、蒼生子に御傳へも承りぬ。こゝにかはりなくなむ。御題の歌とも受けとりぬ。十二日に人給へ。

こゝも十三夜に月めでてせむとするなり。すべて九月十三夜の事を、後のこよひなど云ふは、後世連歌やうのものゝいふ俗ごとなり。十五夜をも、十三夜をも、きと能く詠みかなへむとする時は、歌のかたち屈してわろし。依りて昔は、其の事は端書にして、歌には其の上の景色心を詠候なり。

(題詠は後の世ふりなり。動もすれど其の作、つくりものに陷りやすし。否、題に對して、空中樓閣を顯出せむとするわざなれど、元來つくりものな

り。されどにや。此の翁は常に題詠を好み給はず。よし題をとりて詠まむとするにも、なるべくそのつくりものを避けさするやうに其の門生に教へ給へり。それ誠に然あるべき事なり。されど、凡技藝と云ふものには、何わざにも、本舞臺と稽古場との區別あり。題詠は即其の稽古場なり。地取りを練習する所なり。これを以て、詠歌の本業と思はむは素より誤りたる見解なるべしと雖も、地取の練習決してゆるかせにすべきにあらず。劍法は身を護り敵を討つべき要術なり。面小手を纏ひ竹刀を携へて撃合するは嘘僞なり。つくりものなり。眞劍にしかずといひて撃劍の訓練を癈するものあらむ、武術の嗜を知らざるものと云ふより外なかるべし。題詠は即この撃劍の練習なり。宜しく此の練習場に座して場かずを重ぬべし。唯こせつきたる稽古に惡習を附けざるやうに注意すべきのみ。故に翁はこの課題に拘泥する事を禁じて其の上の工風する事を懇諭し給へり。さりとて、題意をはなれよといふにはあらず。題意以外に奔逸せむは恰も道具はづれの打込をねらふと一般なり。このさかひ最大切の所なるべし）

此の度はおのれの庭を、野遊、又、はたけなどにつくりつれど、家居を縣居と名付け侍り。あかたとは、ゐ申てふに同じこと也。其のよしなど端に書きて月の歌よみ給へ。おもひやりたるもよし。

（猶々かき前文の所へわりがきしたるもの）

類聚名所の一卷、此の方には見當り侍らざりしが、若、物の裏などへ落ち入りてもあるにや。よくあさりて近く見出などまゐらすべし。久しくこゝに預り置しからに、紛れ入りてあらむも知るべからず。過

し日は、たま〳〵なりしを、させる御あへもせで、口をしくなむ。いかで成る可くは十月ごろ彼の事御申候て下り給へかし。

前回題詠の評論中御歌所御題に關する事項は思ひ違ひし處なれば茲に謹んて取消　義天類



漫録

廿一代集七夕歌寄（續）

落合爲誠寄贈

故人　藤伊季輯

新千載集

逢瀬をやたどらす渡る夕月夜　光さしそふかさゝぎの橋　公脩

天の川秋をちぎりし言の葉や　渡すもみちの橋となるらん　津守國通

忘れずよ手向の庭の露とれく　玉の緒琴の世々のしらへは　入道前太政大臣

天の原ふりさけ見れば七夕の　星のやどりに霧たちわたる　經信

天の川夜深く君はわたるとも　人知れずとは思はさらなん　家持

天の原こひしき時ぞ渡りぬる　瀧津なみだに袖はぬれつゝ　友則

たなはたの天の岩船今宵より　秋風吹きて眞帆にあふらめ　顯輔

天の川其の水上はきはむとも　逢瀬は果もあらしとそ思ふ　爲藤

銀河ひとよはかりのあふ瀬こそ　經繼
　つらき神代の恨みなるらめ

たなはたの五十機衣れく露に　冬定
　ぬれに重ぬる秋は來にけり

たなはたの雲の衣は唯ひとよ　從三位爲理
　重ねてうとくなる月日かな

年毎に待もすくすも詫しさは　和泉式部
　秋のはじめの七日なりけり

新拾遺集

久堅のあまの川霧たつときや　躬恒
　七夕つめのわたるなるらむ

天の川かちをときこゆ彦星の　赤人
　七夕つめとこよひあふらし

さはるへき契ならねと七夕の　後岡屋前關白
　くるゝ待間やくるしかるらん

幾秋もたえぬちきりや七夕の　前關白左大臣
　待に甲斐ある一夜なるらん

九重の庭のともし火影ふけて　入道二品親王
　星合のそらに月そかたふく

幾年をゆきめくりても七夕の　從二位行家
　ちきりは絶えし夜半の下帶

七夕のまれに逢瀨も年ふれは　經顯
　渡りやなるゝ天のかはなみ

かさねても恨やはれぬ七夕の　忠季
　逢夜まとほの雲のころもは

いつの間に紅葉の橋を渡すらん　源兼氏
　時雨ぬさきのはしあひの空

天の川れもふか中に船はあれと　宗尊親王
　かちより行かかさゝきの橋

七夕の五百はた衣かさねても　經宣

秋の一夜となにちぎりけん

新後拾遺集

淵は瀬にかはらぬ程も天の川　爲子
年の渡りのちぎりにぞある

さても猶薄き契りや恨むらん　入道二品親王性助
年に稀なるあまのはころも

七夕のこひも恨も如何にして　入道一品親王法守
一夜の程にいひつくすらん

新續今古集

天の原空なる河のわたしもり　洞院攝政
秋にはあへず御船よせなん

天の川かはれとすみて彦星の　小宰相
つまむかへ船まつや久しき

天の川八十の船出も見る許り　安嘉門院四條
雲なかくしそはしあひの空

七夕にまをのにい原ひきかけて　源師光
くること絶えぬ星合のそら

昔より如何にちぎりて七夕の　俊頼
人やりならぬもの思ふらん

七夕のゆきあひに靡く初尾花　爲定
こよひはかりや手枕にせん

七夕のあまの羽衣つゆちりて　雅朝
ゆきあひの空に秋風ぞ吹く

七夕はうら珍らしく思ふらん　俊成
今宵は雲のころもかへさて

七夕の心やこよひはれぬらん　慈鎮
雲こそなけれはしあひの空

星合のこよひはかりは天雲の　後八條入道
よそにへたてぬ契なるらし

七夕を渡して後はあまのかは　兼輔

波たかきまて風もふかなん

天津風おふくともゆめ霧たつな　恒徳公
こは七夕の織れるにしきそ

年毎にいのるなかにも七夕の　保光
今宵は殊にこゝろあるらし

七夕のなみたの露に天のかは　等持院
水かけ草やなほなひくらん

右歌二百三首　（完）

右一帖は、少女の求によりて代々の勅選の中なる七夕の歌を、筆に任せてしるし與へぬ。しかあるか中にも、御製は、おそれなきにしもあらねど入れす。其外、ひとつふたつはもれ侍るもあるべし。しひて罪することなかれ。あなかしこ。

寛永三年文月　藤伊李

主從心得草（受前）

諏訪忠元寄贈

玉汝抄にいわく、人の世にある甲斐は、世界と和合して暮す事なり、其の和合するに、一ッの妙藥あり。無理いわず、無理せねど、五倫みな和合する者也。いふまじき事をいわず、せまじき事をせず。しれたる通り、ありべかゝりに言もいひ、身も行へど、互にみなうちとけて和合し、いひぶんなき者なり。家業に無理せず、むりいわねど、賣人も買人も、皆得心するは和合なり。諸職ともに此の通りなり。又主人は家來に無理せず、むりいわねど、家來の心うちとけて二心なし。主人を大切に思ふは、家來の心打とけたる也。家來は主人に無理せず、無理いはねど、主人の心うちとけて、（無理とは本心をゆがめるをいふ）家來を子の如くに思ふは、主人の心打とけたる

なり。とあり。又眞砂の湊といふ書にいわく、大君も小君も、家來にいつわりある時は主人を疑ひ、主人は家來をうたがふ。これ終に國家を亡ぼす。といへり。大切の事なり。主從和合してこそ、大切もたち、國家も治るなり。もし不和合ならば、國家の災ひ、其の身の恥辱多し。歌に、

無理いわずむりせぬ外はなかりけり
　かゝる人をぞ仁者ともいふ

舟と水中よくてこそ世はわたれ
　心のあらきなみかぜぞうき

心學五常辨にいわく、人の心の長きもあり短きもあり。終日我が心にかなわんといふは僻事也。されば、莊子に曰、鴨の脛短しといへども、是をつがば憂なん。鶴の脛長しといへども、是を截ば悲しみなん。脛の長きも切べからず。短きをも續べからずといへり。自身を自身に仕ふるに、終日心にかなわず。況や。他身につかへんに、如何でか心に叶わんやといへり。故に、中をとりて心得て仕かふべきなり。歌に、

我か身だに我が儘ならぬ世の中に
　人のそむくがとがならばこそ

人の心の同じからざるは面の如し。世間の人毎に、各々心かわれるゆへに、人のなす業が思ふ如くならざるは、人の心のありさま也と思ひて、我が心にかなはざるとて、人をとがむべからず。是を堪忍していからず、詞を出さざれば、無事にして我が心安く、人に障りなし。是、世に交るの道也。歌に、

忘れかしな世の人顔のさま〴〵に
　かはれどかはるこゝろ〳〵を

盲安杖にいわく。己をかへり見てれのれをしれ。

たとひ、學文ひろくして、いか程物を知りたりとも、己を知らざれば、物をしりたるにあらずして、人を知る事あるべからず。己を知らざるは愚人なり。かようの人は、他人を誹り、あしけれども、我か心にあふ人をよみんじ。又よけれ、其の我か心にしたがはざるを惡み、萬事に憤りふかくして、己と己が苦しむ僻事にあらずや。萬人我にかなはざるをしらば、我も又萬人に叶はざるをしれ。我に僻事なき人は、萬人を捨ず、萬人を捨ざれば、萬人も此人を嫌はず。是、萬事に誠ありて、なさけ深き故也。己をしりてひが事なきを德める人といふ。僻事ある時は、人を誹り、苦しみたへずといへり。

いたれる人は物に任せて、己に任せず。愚人は己に任せて、物に任せず。されば、己に任する時は、苦樂順逆共に苦也、物に任せる時は、苦樂順逆共に樂なり。下愚の人は、心やはらかなる能人をあざけり、賢なるを惡み、いやしきにしたしみて人のあしきをよろこぶ。

人の生れ付は各々同しからず。得たる所あり、得ざる所あり。是に得たりといへども、かれに得ざる所あり。何事も、一人の身に、よき事斗り備れる人なし、其人の得たる所を取用ひ、得ざる處を責べからず、一事よきことあらばとりもちひて、其餘のよからざる所を咎むべからず。我か身をかへり見ば得ざる事多かるべし。若、人の得ざる處をせめて、得たる所を捨ば、天下に用ゆべき人なく、交るべき人なかるべし。得たる處を取用ひ、得ざる所をゆるして責ざれば、天下にすたれ人なし。人に交るにも、如此すれば恨なし。

（未完）

紅葉のたびの記（つゝき）

佐々豊水　寄贈

十七日　御船のいづるおとより、みづからの船も出して讃岐の金びらに詣でんとおもへど沖を行、しし島に船かゝりす。翌日は、夜をこめて船出し、こんぴらに詣んと定しに、夜半すぐるころより雨降出し、とまなどふくとていとさうざうしく、夜一夜夢もむすばず、まどろむかとおもへど、又風つよくふき、浪のおとかまびすしく、とかうするまに夜もあけぬれど、起あがるべき心ちもなし。

十八日　己の刻ばかりに風は治りながら、雨なほやまず、空のはるゝを見合、けふも此湊に滞船しけるはれなど、明日はこんぴらへまうでんとおもひ居けるに、夕つかた雲はれのきて、入日も西の山のはにかがやく。

十九日　夜をこめて船出せんとおもふに、風もしづかになりける。自の船は大船なれど、たどつの浦まではつかぬよしいへど、萬喜丸にのりうつり、夜のあけはなるゝころ出船し、己にちかきころみなとにつく。それより駕にのりて行、御山ちかき家居にやすらひ、是より山までは十八町の坂を歩行にてのぼる、からうじて宮居につく、神體開帳せさせて拝む、いと尊くもおぼゆる。かねて此御神しんじけるに、はからずも詣けることと、恵のほどかけまくもかしこくぞおもふ。坂を登てみれど、四方の山々を目下にみやりて絶景なり。飴といふものをあきなふもの數多あり。はじめの家にてやすむ、ひまどりては日もくれなん、たどつの浦より三里ばかり行きて、しし島に、鳳麟丸かかるところへつきぬ。

二十日　けふもてん氣ながら追風もなく、おし船

にて行、今よひは御手洗に旅泊する。
二十一日　けふも天氣なからたひてなくれして出船し、れんどの瀬戸を通。宮島へ心ざし侍れば、又れして行、三の瀬に船かゝり侍りける。
二十二日　空晴、七つごろ宮島へつく。あがりて歩行をゆく、樓へ登て所々拜みめぐり、海の面をみわたす、誠に日本三景の一といふもうべなるかな。眺望いふもさらなり。千疊敷へ行てみる、此所の家にしばしやすみて、今夜はこの湊に船かゝる、鹿の聲もちかくきこえていとめづらし。
二十三日　空いとよく晴、波もしづかに追風にて上の關まで行船かゝる。この夜うしみつころにてもあらん、船出して灘を渡るところに、風つよく船もゆられ、みづからをはじめ、人々枕もあがらず、ややしばし行ぬとれもひ、こゝはいづこならん、なん里ばかりすぎぬるやととはせけるに、二十五里は越ぬれど、むかふ風にて、佐賀の關まで五里のところなれど、行ことかなはずとて、又上の關まで二十五里をあともどりしけるよし告しらせければ、むねうちつぶれ、かゝる難儀も灘を越侍らばうれしからんに、あともどりしけるときけば、行末なはいかならんと、やすき心もせざりける。
二十四日　申の刻ばかりに上の關へ船かゝる。やうやう浪もしづかになれば、心も落つきて、食事などしけるうち、はや日もくれぬ。しばらく物語などして、枕とらんとするうち、またいかり上る音のきこえけるに、いかならんとれもひあへりて、とはせければ、船を出し侍ると答ふ。順風ならば船出すべきよしをかたくいはせて出船す、追風とはいへど、きのふにかはらず浪の音たかく枕にひびきて、起お

がらんことれもひもよらず、
二十五日　やうやう東もしらむころ、また風はげしくなりける。三十里行て三の崎といふ所に船かゝる。鶴崎までは五里といへど、千里も行れもひして、申の刻ばかりに鶴崎につく、嬉しさ、此所までむかひの小舟きたる。むかふに、とく島といふあり。くがへあがれど、心もはれどれとなりぬといへど、此の舟にのりうつりて、とく島へ上り、暮ごろまで心をなぐさめぬ。こよひは船にて夜をあかす。
二十六日　鶴崎の御茶屋につく。
二十七日　滞留しける。
二十八日　鶴崎をたび立、日たかく野津原につく。
二十九日　明やらぬまに、山路を、まつともしつれ越る。在明の月東の山のはにさし出、ゑもいはれぬけしきなり。

よこ雲はみねにわかれてありあけの
　つきほのほのとあくるよのそら
はるけき野べを行に、すゝきのほにいでしもうら枯て、しろじろとみゑわたさるゝもうべなるかな、けふは九月晦なり。
ゆく秋をまねきもとめずうらかれて
　尾ばながそでの名のみなるかげ
久住といふところにやどる。
十月朔日　けふも坂みちなれど、明ぼののころより立出、山を登り下りして、阿蘇の宮居に詣で、申すぐるほど内牧のやどりにつく。
二日　朝とく出る、的石の御茶屋へ立寄てやすむ。紅葉今ひとしほにそみなして風景よき御園なり。それより二重峠を越る、はげしき登坂なり、峠より熊本御城みゆる、しどし歩行にてゆく、山々の木末い

ろなるをみて、

やま／＼の染るもみぢにたびごろも
日かずかさねしほどぞ志らるゝ

今日大津にやどる。此所まで月翁むかひにとて出來る。年月をへだたりし對面のよろこび、いふばかりなし。物語はつきせねど、翌日は熊本へ着日なれどとて、名殘多くもたちかへりぬ。熊本よりも、此所まで、人々むかひにとてつかはしたまふ。

三日　道もちかきところなれど、辰にすぐるころやどりを出る。東まで聞えつる五里の杉の林を通りてゆく、櫨の紅葉こがるゝばかり染て、常磐木の中ところどころにみゆるも、なほはえありて目とまりぬ。立田口にてやすみ、申の時ばかりに熊本の御館に着きぬ。

豊水曰、このかみとは細川越中守重賢朝臣なり。月翁とは、宇土藩主細川中務大輔興文朝臣なり。なほ、歸上の紀行もあれど、次回にものすべし。

明治三十一年八月寫しぬ

小竹園　佐々　豊水

橘舍漫錄（續）

橘の家主人

殿樣　殿樣年々隨筆

殿といふは、敢て其の身をさゝず。居所をさしてよぶ禮節なり。物語文どもに多く見えていと古し。樣といふは方角をさす。西ざま、東ざま、とざま、かうざまのさまなり。五百年來の日記どもに、洞院樣、西園寺邊などやうにかける常なり、この樣といふは邊といふに同じくして、方角をさす。そは、たゞ、外々のうはさする所にこそいへれ。まさしくその人に

對して、樣とも邊ともいひし事はなし。室町殿の比より、等持院殿樣、鹿苑院殿樣などいふ事きこえて、後には字體によりて尊卑をわかつやうの事出來たり。この殿樣と重なりたる樣は、專ら今樣のおもむきなれど、なほ方角をさす本の義遺りていとよろし。茶壺といふ狂言に、判斷なしてたび給へ、所の撿斷殿樣とうたふ。世上なべていひしことなるべし。今なべてはきこえねど、尾張美濃の民間に、庄屋殿樣、醫者殿樣、舅殿樣、禰宜殿樣といふ事あり。此四くさの外、をさ／＼きこえず、なま心ある者は、詞重なりとて、恥ていはず。たゞ、賤民の口に殘れり。これ三四百年來の古風なり。

主人いはく、主君とあるべき君といふことを、今は常につかひ。從僕とあるべき僕といふことを、今は常につかうはいかゞあらん。まして、臣妾といふべき妾といふことを、物學びせる上に、男女同權など、ことゞ／＼しくいひしろふ公會の演説などにもいふは、いとあやしきことなり。謙讓の德といはゞ、それにて語なからん。さても、文字だけにても、何とか爲がたなきものか。なみなみの人、下の人にもさいはゞ、われより上の人、上の上の人、かしこかれど、眞の君には何とかいはむ、聞かまほしき事にこそ。

結句と擧句

物ごとの果の事を結句といふ。四五百年來の消息に多く見ゆ。詩の結句よりうつれり。今は、あげくといふ。連歌の擧句よりうつれり。

主人いはく、語源をもどむれど、なほおもしろきことといと多かるべし。

すくせ

蘆庵のわかゝりし時、いと貧しかりけり。物をかふに價の三つたらざりけれど、隣にてひかりて買ふ。さてよめる「くやしくもなにはのみづのあしをなみてと浦かけてからせつる哉」あはれに心ぐるし。正明も、市が谷わたりに蝸牛どがりの身をいるゝ宿はありながら、朝三暮四に心ぼそし「あはれともみやはとがめぬ淺間山あさましきまで細き烟を」、すくせとはれもひつゝなむ。

主人いはく、學者薄命ともいひつべからん。さても、自らせまらぬ心の奥さへはの見えていと尊し。いかに山はどさはに金子つみたりとて、この風流心もたるもの、そもいくとくぞ。

餘情と余韻

和歌の第一義は、餘情と餘韻とにあり。餘情とは、「年を經ていのるしるしは初瀬山をのへの鐘のよその夕ぐれ」、「樒つむ山河の露にぬれにけり曉おきのすみ染の袖」のたぐひなり。上の歌は、よその夕暮にて、我にはあはずして人にあふ事を思はせ。次の歌は、曉おきのにて、わかゝりしほどは、をとこに別るゝとて、涕に袖をぬらせたる事をきかせたり。餘韻とは、一首打よみ終りて、後まで其様心にしみ、目にうかぶやうにて、名殘あるこゝちするをいふ。「道の上の草の青葉に駒とめてなほ故郷をかへり見るかな」、「白雲のたえまになびく青柳のかつらぎ山に春風ぞふく」などの類なり。上の歌は、故郷を顧みて駒とめたらんさま、心にしみて去らぬ心地し、下の歌は、繪にかきたらんやうなるけしき、目にうかびて失せぬ心地す。その目に殘り、心にのこるが余韻なり。これを高しとしてねがはざるは闡提なり。歌よまむ人に、必ずこの境にいたるべき佛性はある物

なり、心強く思ふべし。

主人いはく、歌を論ふには、人によりてくさ〴〵あるべし。たゞ余情と余韻とはすべからぬにや。古の詞の洗濯きりはぎするを事として余事を去らぬ人、たゞ新しき物や詞にのみ走りて、たゞ言ならぶる人には、共に語るべきことならじ。

既婚女の名義

御臺所とは、御臺盤所といふ義にやあらん。御は寝殿のもやにすませ給ひて、北庇に女房の侍あり、臺盤所といふ。申べきにとあれど、御臺盤所の女房につくる故しか申なり。北政所とは、申すべきことを政所につくる故なり、北とは、北方におはしませばなり。北方といふも、女方につけていふ名なり。奥方とは、家の奥もやにすむ義、御しんそうとは、深窓といふに似たり。長恨歌なるは未嫁女のことなれど、それも奥ふかくすむ故の義なれど、人妻をいふも其義にて、意かよふにやあらむ。尾張にてごつさまといふは、御室様といへるにや。かみさんといふは物語にあるうへといふに似たり。又何がしのれかたと云、其家さまをさしていふなり。女房といふ房も、奥ふかき方によれるにや。かゝといふは其義を知らず。

主人いはく、御しんぞうを俗に御新造とかくは、或はあたれるにはあらじか。上古の風は、男女約成りて、ともに住まむとするには、必ず新しく住むべき家を造りぬとか。しんぞうの名は、若きにのみ用ゐ、そを延いて未婚女にまで及ぼしたるやうなり。もし深窓にすむによりてならで、年老いぬとて何かあらん、さるを若き人に限れるは、故あるに似たり。さるにてもさかしらにや。大方の教を乞

はひ。（をはり）

海女

海東子

天さかる鄙とはれろか、白浪のよせてくだくる荒磯の、志摩の片邊に、年月重ねし吾等には、目にも、耳にも、わけて、都人に告けまくれもふ事とては、あらず、されど、すべての事も、處かはりて、目なれざる方には、耳あたらしくや聞ゆむ。

いでや、志摩の生業として、未た世の人には、其實相を知られざる、海女の次第を告けんも、あながちに、かひなき業にもあらざるべし。

奥深き閨の中にひそとなり、あまたの人にかしづかれ、春は花見、冬は雪見とあそびつゝ、いまだ、世の艱難辛苦をなめざる大方の孃達に、海女人の業をいとなむ事の由を告け參らせんとす。

あはれ、日にやけて、色はうるしのごとく黒み、みどりなす髪は、潮にさらされて、くちば色とかはりはてたる、これぞ、なべての海女等が姿なる。わけて、其業にさとくいそしむ者は、一層いみしかる、されど、此處の島人には、さるあやしげなる姿の、いたくめでらるゝころ、世にことめきて聞ゆれ。

女の童、漸々、十四五歳にもなれど、まづ、水くゞる業を覺ゆ。それより、五十路の坂を越ゆるまで、又の住を海に定め、朝毎に、あかねさす日の出を、浪路はるけき海原にながめ、たのもしく住家をたちいで、二人三人、一ツ小舟に打乗り、遠近の磯邊をさしてこぎゆく。

くろがねをもとかさん計りの夏の日にも、常に水馴れさる者は、唯、二時三時、浴するさへ、寒を覺ゆ

るに、彼等は僅二月三月、北風雪を散らす冬をわきては、春秋夏と、其折々につけての磯ものを求めんとて、まだ、肌さむき、朝まだきより水くゞりするなり。

今、其さまをしるさんに、おの〳〵目ざす磯邊にいたれば、細繩もて、一ツの桶を己等が躰に結び付くるなり、桶は得物を入れんが爲、細繩つなぐは、桶のながれざらんか爲、淺き所は、四尋、五尋、深き所は、七八尋、わけて、ものすごきは海底の常、汐干にだも見えぬ、かくれ磯には、うす闇きまでに、藻草おひしげり、潮ことにひやゝかに、身の毛もよだつ斗りなる、海女等は、とりわけ、さる所をえり、素肌のまゝにて、海底に入り、息のつゞかんかぎり、あやしき岩間をかいくゞり、我か藻草を搔き分けて、萬の貝類をもとむる、かくて、浮び出で、苦しき息をやすむれば、やがて、又くゞり入、また浮びいで、手足もかなはぬ迄に、全身冷え渡れば、磯邊の渚に舟を寄せ、そこはかと、流れ寄りたる、木のはしを拾ひ集め、辛くもたき火に、身をあたゝめ、又もや、磯邊に乘りいでゝ、浮びつ、沈みつ、ひねもす怠る事ぞなき。

かゝる危き業にしあれば、まゝ惡しき鱗魚に傷つけられ、或は、あやしき岩間に息をうしなひ、玉の緒の絶えし事有りきと聞くも少からず。されば海女等が、海に入らんとする時は、心に思ひ定むる所ありとかや。

あはれ、家には、かえがたき親もありなん。いとはしき子もありなん。いかに、生活の道とはいへ、かゝる危き所に立ち、宿世つたなく、海底の藻屑と消え果てんには、あとに殘りし親のかなしみ、明けく

れ慕ふ子のなけきは、更にも云はず、友白髪迄もとちぎりし、そが夫のわかぬ別れの、いかに本意なくれもふらん。哀れ、〱。身は、いひがひなきいやしきゝはの者とはいへ、もとこれ同し大和の女郎花ぞかし。あはれ、春は彌生の花にうかれ、秋は千草の野に遊びくらし、倘あき足らぬ、世の姫君達よ。人のあはれを、よそにのみれ見たまひぞ。

才くらべ

蓬生屋女史

江口の妙が妙才

妙とは建久の頃、山城の國、江口に住める遊女なり、妙女、歌に妙なりけるが、一夕、西行法師此處ら行脚して、雨にわひ、くるしきまゝ、此の妙女が家をとひ、一夜の宿りを求めけるに、御出家はかゝる宿り求むべからずとて、とざせしまゝ、迎へも入れぬに、西行いたくぬれまとひて、

世の中を厭ふまてこそかたからめ
かりのやどりををしむ君かな

とよみ入れしに、妙女もれくれず

世をいとふ人としきけばかりの宿に
心とむなと思ふばかりぞ

と答へ歌ひたり。西行は己が出家をかりと云ひ、妙女は世の中をかりとよみかへしたる才もいみじく、歌がらもまた妙にぞありける。流石の西行法師もいたく感じ、强ひてやどりを求めて、よもすがら歌がたりして去りけりとなり。

ある尼が頓才

西行、同じく行脚して、津の國浪華をよぎりけるに、

ある尼が、手づから板屋根をさしつくろひをりけるを見るまゝに、「賤が伏屋をふきぞわづろふ」とよびかけたりしに、尼ふり向ざま「月はもれ雨はとまれと思ふにぞ」



とつけたりと云ふ。これもいみじき才女にこそ。

定家卿の歌才

定家卿年三十を越えて、父俊成卿に申さるゝやう、若き折りは考へもせず歌よくよめりしが、此頃はいたくおくれて、よろしきと思ふ歌も出ず、いたく父君におとりたる事よとしをたれけるを、否、中々に我は汝をうらやましく思ふなり。我にまさると覺ゆるふしのみ多きぞ、など語られけるが、さる事もや俊成卿老いて後、述懐の歌をよみて定家卿におくられけるに、

定めなき世にも若きは頼みあり
とにもかくにも老いの身ぞうき

との返歌に定家卿

とにかくに老はあまたの年もへつ
定めなき世に若き身ぞうき

けに、人の命は老若をとはぬものにて、げに老いはあまたの年をつみ來たれど、若きはいつ幾日、年もつまでみまかるやはかり難し。俊成卿のもいみじけれど、定家卿はまたすぐれたる才にてぞ。

笑話（奇談一笑）

かゝみ

萬能一心

世に、萬能一心といへる諺あり。ことの起りを尋ぬるに、古昔、人ありけり。一日、海に遊びて、水底におちいり、龍宮に至りけるに、一尾の魚來りて、御身、龍王に謁見へなど、必、一心てふものを賜はらんことをもとめ願ふべし、と敎へけるに、その人、如何なる所以にて、かゝるべきかを知らず、徒にうべなひて、やがて、龍王にまみへ、敎のまに／＼、一心を請ひもとめけれど、龍王は、一人の少女を授けけり。これ、その一心といへる者なり。その人、遂にこの少女を率て、家に還り、養ひ女と爲していとをしみけるに、是より後、家の生業、いたくさかえて、欲りする程のものは、何にても得られずといふ事無き身の上となりぬ。かゝりける程に、その妻も、亦、一人の女を産みて、萬能と名づけしが、その人、遂には、萬能をめでいつくしみて、漸に、一心をうとみけり。或時、わづかの事に因りて、いたく、一心を責め、箒を以て、きびしく、一心を打ちけるに、一心、忽、その箒の中に入り、竟に、その所在を失ひけり。是より後、家の道、復、いたく衰へ、つひには、朝夕もさゝへ難きやうになり行きぬとなん。是れ此の言のもとなり。

入佛事

川島白鷺

時に芳藏、お前ももう學校は卒業したし、お梅も最う妙齢ではあるし、それに己も年を取ると氣が急しくつて、一日も早く孫の顔でも見たいと思つて、今ぢやそればかりが樂みだ、所で婚禮の一件だがの、どうだ、近々の中に眞似事丈でもしてくれては、と父なる人の言葉に、芳藏は頸を垂れて、　御最ではありますが、併しさう急にと仰有つては困ります、まだ私も漸と形式的の卒業證書を得たと言ふ迄で、目的はこれからの奮發にあるのです、今から安心して仕舞つては仕方がありませんから、先づ十月の登用試驗の結果でも見てからの事に。　それもさうだな、　ではそれまで待つとしやうか、　と話は他に移りて、其まゝ東京の景況など睦じげに語り合ふ。

此芳藏といふは此家の養子にて、此程東京の法學院を卒業して歸省したるなるが、今年二十四と聞けど、年よりは老けて、何處とやらむ神經質らしき若者なり。

夕方より芳藏は、程遠からぬ實家へとて立出でぬ。過日歸村の節に訪れしが、其折は取急ぎしまゝ、落着いて十分の話も出來ざりしこととて、今日はと思ふ樂に、自ら足の運びもはや我家に近く、唯見れば、養家の大構とは打て變りて、蝸牛の只殼ばかりなる破屋、簷傾き壁は落ちて、風の夕、雨の朝のさこそと思はるゝに、早や胸潰れて、あゝ、かゝるいぶせき家に、吾生の親達の住み給ふかと思へば、悲しさに門の戸明くる手も力無く内に入りて、　大分お暑う厶ります、お二方ともお變りは御座りませぬか、　と框を上れば、　オヤまあ芳藏が、よくお出でだ、今

日は丁度お父さんが、お前に少し話が有るから、明晩でも一寸逢ひに行かうと言つて居られた處、さあ〳〵此方へ、と母は憂に悴れた面にも、隱されぬ悦の色を現はして、針箱襤褸など片寄すれど、父は帶片手に急しく掃き出し、座に着きて、彼方も皆樣御機嫌克くて、然うかい、さあずツと此方へ、其方は疊が穢い、どうも彼方とは違つて、此通りの破屋で。否、お搆ひ下さいますな、まづお二人樣ともお壯健で、何よりで厶ります、と言へど、あゝ身體だけはまあ丈夫で居るが、何時も〳〵貧乏神に附け廻されて、生甲斐もない身の上、と遉は女の直に泣言いひさして、不圖淋しげに打笑み、偶に來たものを、私とした事が、來るが匆々斯樣な話をして、御免よ、と打詫ぶる母の言葉に、芳藏は胸も張裂くぞかりに悲しく、御尤で御座りますと腹の中。お父さんは矢張り、山本さんへお出なさるのですか、と問へど、父は力無げに烟管を叩きて、己ももう六十近くなつて、とても一人前の仕事は出來ないが、山本さんが可愛さうに思つて、面倒見て下さるから、どうやらかうやら生命だけは繋いで居るよ、お前に斯麼談は聞かせたくないが、つい苦しまぎれに愚痴も出るのさ、まあ聽て呉れ、此瘦腕で一日働いた賃錢が僅十錢、何して夫れで二人口が過ごせやう、仕方がないから婆さんも此年をして毎日の糸取り、それで漸と其日を送つては居るもの丶、年は寄る、體は弱る、それで死水を取つてもらふ者も無いといふのだから、眞箇に心細くての、それも始めから無いものなら、何とか諦めの就け樣もあらうし、又其樣な覺悟もしておいたであらうが、立派な男の子を二人も有て居ながら、何の果因か、賴みにし

てゐた兄は昨年の虎列刺で死んで仕舞ふ、今ゐらいゝ者になつて、誰も羨しがるやうになつたお前には、係る譯にも行かないとはよく〳〵の因果、思へど思ふ程心細くて寧そ手取早く死んで仕舞つたらなど思ふ事もある。喃芳藏今更くど〳〵くり返したとて、何の甲斐もない愚痴だが、木村樣から望まれた時、無理にも斷つて仕舞たら、年を老つてこんな思をせずとも濟むだであらうものを、あゝ幾ら悔やんだとて返らぬ事。と嘆つ始終を聞きつゝ腕拱きて考へ込みたる芳藏、悲しき兩親の言葉に思はず心動きて、寧そ此家へ歸らうか、否々どうして大恩ある養家。とは言へ此樣に年を老つて、色々と苦勞なさるゝ兩親を見捨てゝ置て、自分一人何で榮耀が出來やう、あゝ何としたもの、と心の亂れに自ら顏も蒼白め、我にもなく急き來る涙をハラ〳〵と落して、吐息と共に頸を垂れ、哀にも沈みたる調子に力を入れて、お父さん、と呼びかけしが、なに、と返答せられて見れど又氣後れ、やゝ少時躊躇いたる後、此家へ、とやう〳〵言出しまゝ、胸の苦み良心の呵責に、再び後の言葉をつがむ元氣もなし。此家へどうしたのだ、と訝しげに父の尋ぬるに是非無く、ど、何とか、此家へ戻る工夫は、と思切つて言へど、父は、さあ其事だがの、實は己れもお前に其話を仕て見樣と思つて居た所。彼方樣でも大金かけて漸と是程迄にしたものを、今更戻せと言つたとて、おいそれと誰が素直に戻さう、それに又、此方もまさか那麼虫の可い事を言へた義理ではない。併し當人さへ其氣があれど、と言ひさして、昵と芳藏の顏を瞶め、そりや又お前の仕方一つで何とでもなるが、本當にお前戻つて呉れる氣が有るか、と念

を押されては、今更に胸轟き、はい……と答へはせしものゝ、又もや心の苦悶、さりとも思はぬ父は、傍の母を顧みて、なあ婆樣、先程話したやうに、と目もて打合せつゝ、やをら芳藏の耳に口寄せ、何事をか密々語り聞せて、の、さうしたらば甚麼なものだへ、と父の言葉に、母も一膝躙り寄りて、眞個に濟まないことだが、外に仕方もないから、お前も心苦しうはあらうが何卒、と手を合さむ計りに賴まれて、芳藏は一向にわなゝく唇嚙み緊めて、は、はい承知……致しましたも口の中なり。

軈て暇を告げて立上れば、兩親とも大儀なる老の軀を起して、忠々しく門口まで送り出で、今の話を、可いかね、賴むよ。宜しう御座ります、とばかり芳藏は、堪へ兼ねし淚の一時に溢れ出づるを、見られじとて、深くも頸を垂れて、其儘足重げに歸る路すがらも、考ふれば考ふる程空恐ろしく、如何に血緣の羈絆に引かるればとて、海山及ばぬ大恩の養家に、何して其樣な不孝が出來やうぞ、殊に情も操も美しきお梅に、何してまあ其樣な邪險な仕打かならうぞ、よしや生の父母の情には背くとも、飽くまで養親に義理をば立てゝ、いや／＼あのやうに我子に手をついて賴まれたものを、と左右の分別も定まらぬ中に、いつしか養家の門口へと着きたれば、何とやらむ大罪でも犯しゝ心地して、閾高く、足も竦み、身を縮めて漸く内に入れば、見るより養父は、お梅、芳藏が歸つたよ、さぞ汗になつたろう、直ぐ行水をつかうが宜い、何かへ、彼方はお二人ともお變りはなかつたかへ、それは／＼、未だ夕飯前であらう、今日は己が手料理で、お前の好な蒲燒をした、

お梅、早く芳藏に膳を出してやりな。
何時に變らぬ優しさに、芳藏は胸も潰るゝ思にて、斯く迄御慈愛深き養家に何して仇がと又もや目に有つ涙。湯浴もそこ〳〵に、折角の晩餐も味無く濟まして、其まゝ頭痛がするとて、直ぐ床に入りしが、いよ〳〵心の苦悶は留め難く、獨り枕にくいつきながら、あゝ實の親にも増る其大恩を仇にして、どうして心にもない放蕩が出來やうぞ、又あの可憐なお梅を見捨てゝ、何して其様な作放埒が爲られやうぞ。併し又、彼方のお父様やお母様が、あの様に年寄られてから、賴る者もないお心細さを思へば、と思案に餘りて呻き悶ゆる折しも、障子押し明けてつと轉び入るお梅、其儘わつと泣き伏すに、芳藏は呆れて跳ね起き、ど、何したの、と言葉やさしく背を撫づれば、お梅は怨めしげに面を擧げて、　貴方はまあ、何故其様なお心に、と言ふか少女の精一杯、ねつ、どうして其を、と思はず乘出せば、　先程からの貴方の御容子、お父さんも大變御心配なさいまして、若し體でも惡いのなら、早く醫者も呼ばねばならぬと仰有いまして、妾と一所に障子の外まで參りまするど、中で何やら貴方のお獨言。　そんなら、あのお父様もお聞きなすつて。　はい、お聞きなさいまして、其まゝ彼方へお出でなさいましたが、妾は、あ、餘り情なうござんして、　と言ひさして又もや泣き伏すお梅。芳藏は義理と情と恩愛との三筋の繩に縛められて、少時は石の如く身動きもせざりしが、　あゝ惡るかつた、赦して呉れ、　とのみ、苦しげに吐く太息は悔悟の根と共に長し。

間も、なく芳藏は、お梅と結婚の式をぞ擧げつ。正しき身持は前に變らで、悲しき實家の累も忘れ果てたる如きと共に、其燃ゆるやうなりし青雲の志さへ消ゑけむ、豫て期したる登用試驗の十月は來れど、再び上京なさむともせず。永く我家に朝夕の膝を交へながらも養父との間は、何とやらむ冷やかになりもて、ありし昔の睦はとこしへに破れたる間に立ちて、獨り効なき心を惱ますはお梅なりけり。(完)

須磨の月(五)

白魚女史

力とたのまんずる夫を見るまゝに、中々に矢竹心よわりて、乳母は悲しく、涙しとゞにわきかへりて、伏しもまろむむかりなりしが、さりては人目もある事よと自ら制して、つと内に入り、姫をも下ろし參らせて、あたりを見廻し、なほ物云はで、松のとばそ固くさしぬ。これ、此の家は、乳母が夫、牟禮兵衞と云ふものゝ家にて、女の方より通ひ行くべき恒の道もあらぬを。一度はおどろきし牟禮兵衞、姫たちがうちしをれたるさまを見るより、さては、日來聞きつるまゝしき母の非道のしもとにいためられけるかとまでは容易く推したれど。まさかに、さぞかりのぬれ衣きて携へられしとまでは汲みも知らねど、流石にかしこう上座にすゑて、爐に松などともし、柴栗くすべなどして、もてなしながら、さても、如何なる母君がしもとにはふれたまひて、いぶせき賤の住家をぞ、かくは尋ねられけるよなど、まづ慰め貌にとひかくれど、姫はたゞ御涙に答ふるのみ。さてもかゝるあれたる軒に、つれだち奉るはよくよくの訶責をうけられしにやあらんと妻を省れど、あ

からくれなゐの涙、袂にみなぎりて、なか〳〵にそめ出さん言のひまもなかりけるが、やうやく心をしづめて、昨夜の事罪なき事。姫が心ばへ、せき上げせき上げ物語り、他に忍ばせん方もあらず、さりとて見殺しにし奉らんも忍ばれず、忍ばれぬ心に、君をと一すぢにたのみて、忍び參りたり。よきやうにかくまひ給はれとてむせびかへれど、爺よ、迷惑ならんがと牟ど云ひさして姫も涙いよ〳〵しどゝなり。さては、さばかり、何とては犬じもの、ばけの皮ひむきて、てらしてはやり給はぬ。姫たちを御子にもちたる彼れは如何なる冥加のけものぞや、天道をも恐れずや、憎しとばかり齒がゆがる牟禮兵衛に、乳母がひねんさはまたひときは加はりて、互にこぶしを、握りての恨み、姫はたゞ氣の毒に覺ゆるのみいたく心をいたませつるよ、心なき自らよと云ひてはむせびかへらるゝのみ。

さばかりの姫御が御孝心、よしや天の照覽あらずとも、この牟禮兵衛が身をすてゝも、必ず御守護し奉らでやは、のう姫上、此の如きのあれたる軒、身を入るべくもあらず覺されんか、之もかりのよのかりの御住居、もはや夜も更けたり。ゆゝしくはあれど、かりねの御夢のみ、たゞ御心安う結ばせ給へ、此處は山里、外には獸も多く候へど、家には狐も狸も住み侍らず、たゞ今より君が御守りの爺一人と、なんどに早も臥したる姫のしもべの一人あるのみ、はやはや御心安う、のう、むさけれど、わらふとん、のべ奉らずやといふに、げに〳〵嘸や御つかれましましけんものを、御みあしのきずは如何に、いたませはあらせずやなど、思ひ出づるまゝ、何かと問ひなぐさめ、臥戸かまへて、いざ〳〵早う、草葉にもれど



らぬ露けき床にはあれど、うき世のさがとあきらめられて、しばらく忍ばせ給へなどすゝむる乳母が心は幾重、あつきなさけのつゆに、姫はいとゞぬれまどひて、とかくを云はずふしどに入りたり。

其處も此處も山里にはあれど、住みなれし家は、流石屋も深う、軒も高う、玉だれのをすもる月も床かしかりしを、此處は軒もる風あらはに、木の葉は近く枕の下を叩くやう覺えて、げになれぬ草枕、露はおきまどひ、梟は鳴きあかし、床も心もさえ〳〵てねぶれざりけるが、流石に二人がこゝろざす柴のけぶりの絶えぬあつさに、もる風も忘られて、曉近く妹姫のうちまどろむけはひ靜に、姉君もやゝおくれて、枕かゆる音しばらく絶えたり。さては、うちしづまれしけはひ、さるにても御いたはしや、生みの母御前は如何に草葉のかげになきておはさんなど、ひそ〳〵なげき語る二人が心をも知らで、憎くや、群烏の聲かしましく夜はこゝに明けはなれたり。

思ひがけず御目さまされぬも夜べの御つかれなど云ひあへるその身たちも、いつかまたまどろみけん、南のえんあけて、啞僕のきやつ〳〵と笑ふ聲に、ふとおどろけど、姫ははやう、床さへ上げをられぬ。あな、そのまゝにおき給へぞよろしきものを、さてもいぎたなき乳母ではありけるよなど云ふを、啞はめづしげに、彼方を見、此方をながめ、何やらん主人に問ひをるさまのをかしさ。爺はほゝ笑みて、姫たちはまだあのやうの動物を見ろなはざらん。されど、狐御前よりは罪なきもの、われは人猿、大根、人盆やりても見そなはせ、なまのまゝにて二本にても、三本にても食べ侍りなど笑ひ慰めつゝ、今日は米の

めしにてもと、くりやに出で行けど、粟のめしのはやけぶりもたゝぬばかりになりをれり。おくれしよ、よべかまへれけどよかりきなどつぶやきつゝ、自ら米をはかり、注ぎてたかんとするを、啞はあきれしさまして見てありしが、やがあやしき手ぶりにとひ、何やらん合點して、頰叩きてわらくすべかくるもをかし。

乳母も其處此處とりかたづけて、かたばかりにはき清めて、水など汲ませ、いざ姫上、器はきたなう侍れど、水のみは山井の淸水、心ばかりにすまし給へなぞすゝむるほどに、飯も出來けん。今日は米の飯、姫君たちにはあらで、我等がめづらしきもてなしならんなどから〳〵笑ふてすゝむる無量のなさけに、姫が心はいよ〳〵ふたがりて、中〳〵に水だに通はざりけり。

今日は山にも野にも出でず、二人してもてなし聞ゆ、啞さへ侍らし、何をか慰む道とて、米のむすび、粟のむすび、二つ造りてとらせなどすれど、米のは笑ひ頂き、粟のは泣くまねして、食るにもにがき顏し、はゝなどふくらかすさま、げに猿に通ひてをかし。さては、柿の實、猿めのとり殘し、かしてくはあれど、何も山里の御もてなし、猿よ、彼れをと、ゆびざし示すに、啞ははや心得て、する〳〵と木にすべりのぼり、己れまづ一つとりて食ふに、御前をも憚らず何事ぞと、つぶてうつまねすれど、首をちゞめて拜むまねなし、よろしきとりて、おそる〳〵もち來るを、さても何と云ふ毛者ぞ、たとへ如何なる山猿にもあれ、牟禮兵衛が僕ならど、人を敬するまねのみは知るものを、おろかにも程こそあれとて、首うち叩けど、遠くのきて、鳴くまねし、はては、今

一本の樹にのぼり、下なるを一つ喰ひさし、ひとり合點して、上なる枝、三枝四枝折りとりてすゝむるは、つる柿とて、熟せぬときはしぶくて食べられねど、熟しては、いと甘きものなり。折りしも、はや熟したるにやありけん。頬たゝきて、すゝむる意、流石、主人のけはひをとりて、尊敬の意を表はしたる心またかくはし。

牟禮兵衛もをかしがりて、さてはよく熟したるかと、己れまづ一つを試るほどに、乳母も器とり出でゝ、皮などむき、姫にすゝめ、此上はかまひなし猿よ、勝手にとれとて手眞似して許るしやれど、うれしげに木の下に至りて、下なるを七つ、八つ、見ぬもなく食ひ、なほ數しらず食ふををかしと見るほどに、にはかに群鳥のとびたつ音ありし。

文林



海邊秋風　東久世通禧

汐あみに出にしひともかへるらん
みにしむ秋の由井のはまかせ

朝秋風　久我建通

朝きりのほのほのあくる大そらに
かりかねなきて秋かせそふく

菊　鍋島直大

植つけしかはらよもきも昨日今日
はなのさかりになりにける哉

秋苔　津輕承昭

つた紅葉かつちりそめて常にみる

苔のみどりもめつらしきかな

鷺立洲　前田利鬯

よせかへる浪の中洲のわしかけに
ひとりのこりてたてるさき哉

古寺鐘　諏訪忠元

榮えにしむかしの跡をとひみれは
かねの音淋し志賀のやまてら

鏡　仝

我か心くもらぬためととりいて丶
うつしみつるはか丶み成けり

髪　仝

降雨をれのかみの毛にはらひつ丶
川のゐくひをさらぬしらさき

海上厂　黒川眞頼

浦ちかく成にけるかなちりはかり
沖にみえてしかりのひとつら

菊をかさして　宮地嚴夫

秋の野に千草はさけととりわきて
まつかさ丶る丶しら菊のはな

霧中厂　大口鯛二

むれて飛ふ厂かねすなり立てめし
霧のあなたや野澤なるらん

雨後紅葉　遠山英一

鵙のなと岡邊の木たちあめはれて
もみちの上にゆふ日さすなり

河邊菊　岩崎勝從

手をふれん子らもなけれは谷川の
きしねの菊はまたさかりなり

妻　師岡正胤

妻に萩子にはなてしこつとにせむ

秋野をわけしけふの志るしに

和田嶺峯のもとへ　大畑弘國

ふしのねの高きしらへはしら雪の
たまなすことくよにひゝくらむ

澤鳴　三輪義方

山澤のみつかけ草もうらかれて
はねれとさむく鴫のたちけり

鴫のたつ蘆間を見れはさゝなみの
よするもさひしやまさはの水

挿頭菊　三浦千春

たまたれのをかめもあれと菊の花
さゝはかさしにさすへかりけり

山路菊　仝

世をさけてひとり入りにしみ山路に
よき友得たりしらきくのなは

山田りと女　佐々豊水

わひの山こゝしきいはほりとりて
ひらきし道はひろくたゝへん

わひの山岩かねたかき勳功こそ
山田の家のたかくたゝへめ

貞宮内親王の御降誕を祝ひ奉りて　下田義天類

咲きつゝくみその菊の綾にしき
またひと種の千代そ添はれる

女鑑といふ雑誌の高崎正風大人の講話筆記を讀みて　菊池眞澄

兼てより迷ふこゝろのうきくもを
はらふも風のなさけなりけり

鹿　仝

引ならす山田のひたのひたふるに

妻かこふらんさをしかのこゑ

夜時雨　足立正枝

ともし火の影もほそりてふくる夜の
軒端さひしくふるしくれかな

曉紅葉　近衛貞子

曉のかねのひゝきにちりにけり
そめつくしたる木々の紅葉

鹿聲留人　鍋島榮子

紅葉かり歸るゆふへの山かけに
ひきとめらるゝ鹿のこゑかな

月あきらかなる夜友きたり　西四辻茂子

久方のつきの夜ころをとふ人は
あかきこゝろを語るなりけり

故郷擣衣　柳原愛子

故郷は家ゐもまれになりぬらん
うつやきぬたの音のすくなき

瀧邊紅葉　小池道子

一すちのたきをのこして秋のやま
なへて紅葉になれるころかな

秋月明　諏訪晴子

浮雲もかゝらてすめるあきの夜の
月もこよひはもなかなりけり

山紅葉　仝

から衣うつのやまへのあやにしき
織かとはかりそむるもみち葉

秋海　仝

よる波もしつかになりて眞帆片帆
はてなく見ゆる秋の海原

秋山路　松平健子

危きもうれしかりけりいかくりの
　ゐみこほれくる山かけのみち

庭秋草　南鄉柳子

庭の面に一もとうゐしわきはきの
　とこゐせきまて花さきにけり

籬菊　坂田泰子

みや人のかさしにもかな山すみの
　垣ねにわまる白きくのはな

河霧　原田蒼生子

きりふかみよするも志らて旅人は
　川へにたちてふねよはふなり

秋水鄉　小川直子

落わゆの色もさひゆくみつの面に
　もみちうつろふ玉しまのさと

月前與　安東菊子

雲井よりさしくる月をさかつきに
　うけて汲む世そ樂しかりける

野分　仝

眞くつ原野分のかせにうちふして
　うらみかほなるやちくさの花



天長節　いにし三日は、かしこくも我が大君のわれまし丶吉日なり。北は占守の島々より、南はたかさごの島のはてまで、新高山の嶺高く、朝日の御旗をひるがへして、稜威の、いや高に、いや廣に、長く久しくかゝやきますことを、ことほぎ奉る。さて、宮中にては、御喪中にわらせらる丶を以て、

ことはきのみのりもはぶかせ給ふと、承りしるすもかしこくてなん。

●れはみめぐみ　兵庫、德島、愛知、岐阜の四縣下、去月下旬以來、非常の暴風雨の爲め、被害不尠趣憫然に被思召、さる十五日、　天皇　皇后兩陛下より、御救恤として、兵庫縣へ金千五百圓、德島縣へ金千二百圓、愛知縣へ金八百圓、岐阜縣へ金七百圓を下賜せられたり。

●貞宮殿下の御殿新築　過般御降誕あらせられたる　皇女　貞宮殿下は、青山御所内の產所御殿より、高輪御殿へ移らせらるゝ筈の處、御都合により、赤坂御所内、舊明宮御殿の跡へ、更に御殿新築あらせらるゝこと、定りたるやに洩れ承る。

●宇佐八幡宮千三百三十年祭　大分縣下豐前國に鎭座ましませる宇佐八幡宮は、　應神天皇の神靈を奉祀せる官幣大社なるが、明三十一年は、御出顯千三百三十年に相當するに付、同年二月一日より、四月十一日まで、七十日間、奉祝祭を擧行することに決し、汎く奉祝會員を募るといふ。

●老孝子　福岡縣下鞍方郡直方町に、山田新氏といふ人あり。天保十年六月の生にして、祖先より黑田家に仕へたるものなり。氏、素行端正にして、嘗て人と口論などせしこともなく、篤實溫厚にして、しかも驕奢華飾を好まず、常に實踐躬行を怠らざりしが、其の父に仕へて至孝なる、夙に鄕黨の感賞する處なり。父は名を樹翁といひて、本年は、はや七十八歲の高齡なり、性質頑固にして、今尙昔の氣風を存し、甚だ嚴格なりけれど、氏は父の此の心を迎へて、活計の頗る困難なるにも拘はらず、父に供ふる朝夕の給養衣食の調度は、力めて昔の富めりし時に

變らざらん事に心を砕きけるに、去る二十三年頃よりは、家計益々傾きて、家族が朝夕の食事は、僅に米に豆腐粕等を混じて餓を凌ぐまでになりにけり、されども、父の奉事は依然として昔の如く、なしける　に、不幸にも父は七年以前より、心臟病を患ひ、老衰せる身のいよ〳〵衰弱を來せしかど、氏は常に枕邊に侍して看護給仕の誠を盡し、終始一日の如く、曾て倦める氣色さへなく、大小便の掃除まで、他人の手を借らずして自ら之を爲し、偶、父の病の快きときわれど、面白き談話を試みて其意を慰むるなど、尋常人の企て及ふ所にあらずと。實に有り難き孝子といふべし。同縣知事之を聞いて左の如く賞金を下賜せり。

鞍方郡直方町　山田新

資性謹直克く父母に事へ實母死亡後父老衰するに追んては殊に孝養を盡し承歡懈ることなし其志行洵に奇特とす仍て爲其賞金五圓下賜候事

明治三十年十月八日

福岡縣知事從三位勳三等男爵　岩村高俊

●孝貞婦　茨城縣新治郡に、りうといふ貞女あり。今年は既に七十五歳なるが、性素温淑にして、幼より父母に事へては孝に、朋友と交りては信を守りしかど、早くより郷人の感稱する處となりしが、天保十四年二月、二十一歳にして、仝郡園部村の農山田儀助にとつぎ、女子二人を擧げて、一家頗る睦まじかりしも、家元貧にして、動もすれど家計に差しつかふることもありしより、儀助は夜を日につぎて農事を精勵し、りう亦わらん限りの力を盡して夫を扶けしかど、家產漸くにして殖し、村內にても富裕の內に數へらるゝ樣になりぬ。然るに、如何なる不幸

にや、儀助は、明治十八年の頃より、中風病に罹り、全身不隨となりて起つこと能はざりしかど、りう女日夜其傍を離れず、病を看其の心を慰むるを以て、此上なき樂とせり。又、日々一回、乃至三回溫湯を以て病軀を拭淨して、淸潔を保ち、病室、及び病床は、日々幾回となく之を淸掃し、其他、兩便より含嗽に至る迄、手づから之に任じて、決して他人の手に委せず、看護の道殆んど盡さゞるなきを以て、隣鄕其德を慕ひ、稱して婦女の龜鑑となせり。斯の如くして十年一日の如く、遂に儀助は、廿八年九月永眠しけり。りうは殆んど寢食を忘れて慟哭し、會するもの覺えず袖をぬらしけりと。此の事其筋へも聞へ、知事より厚く之を賞せられたりとぞ。前者と并びて、一對の好美談になん。

●先師祭　熊本縣菊地郡隈府町にて、有名なりし能書家の城野靜軒先生（通稱彌三次諱充通と云）は、七十四歳にて明治廿五年病死せられしが、本年は、その廿五年祭を、隈府町の公園地に於て、門生の男女一千餘名中よりの發起にて、十月十日執行せり。餘興には、擊劍あり、角力あり、生花あり、花火あり。菊地高等尋常兩小學校生徒數千名の揮毫あり。中にも、遺門生の德永萬壽子が自詠の歌「寄筆懷舊」を

朝夕に筆つかとりて敎へけし
　君がむかしのしのばるゝかな

と全紙に揮毫せしは、先生の筆法を存して、いとうるはしかりし。

明治卅年十月十一日　小竹園主人投

●大貧民學校を設けんとす　大倉喜八郎氏は、先頃來大に感ずる所ありて、基本金五十萬圓を以て一大貧民學校を創立せんと欲し、先づ自家は差當り十

五萬圓を出金し、他に有力者の寄贈金を待つ筈の由なるが、伊藤侯は大に此擧を賛し、氏の爲め助力を與ふる事を約し、既に彼の平沼専蔵氏に説き、平沼氏も相應の出金を諾したりと云ふ。吾人は、此の美擧の實行を願ふこと急なり。

●日本女子アラスカ金鑛に向はんとす　米國市俄古府のある新聞に次の如き記事あり。今や青春妙齢なる日本國の一女子は、黄金の嶺をアラスカに探らんが爲に、自國人の先登として窮北嚴寒の險を冒さんと計畫せり、此妙齢の女子は高橋嬢と呼び、オノト、ワタンナなる雅號の下に、當地雜誌讀者間に知られたるものなり。嬢は、他の日本國人の如く、非常に氣力に富み、新奇の物を好み、而して婦人の位置を高めんことは嬢の最も力を注ぐ所なり。嬢は、此頃アラスカ金鑛採掘婦人倶樂部の一員となり、來春を待ちて、該倶樂部の長たるフロレンス、キング嬢と共に、アラスカに出發する都合なり。高橋嬢は、婦人のアラスカに行きて、其苦寒に堪へずして歸るもの、必らず男子よりも其割合に少なかるべきを示する好機を得たるを喜び居れり。嬢の風采は、身躰小なれども、而かも温雅にして談笑水の流るゝが如し。云々と。

●アーノルド日本女子を婚す　サー、イドウエン、アーノルト氏は詩人として、記者として、當時英國第一流に位するの人物なり。氏は千八百三十二年六月十日を以て英國に生れ、幼にしてロチエスターのキングス、スクール、及び倫敦のキングス、コレッヂに學び、次でチックスフヲールド大學に入り、二十二歳にして學位を得、後、印度プーナに在る官立梵語大學の教頭となり、孟買大學の名譽員となりし

が、千八百六十一年印度叛亂の起るや、其職を辭せり、此間 印度史傳及び政治に關し著作せし詩歌論文少なからず、國に歸るや、氏はデリーテレグラフ新聞に入れり、爾後彼は新聞に從事するの傍ら、大に其力を詩歌に揮ひしが、千八百七十九年に至て、「亞細亞の光」なる詩史を著したり、此書一び出る、稱贊の聲湧くが如く、英國に於ては四十版以上、米國に於ては八十版の多きに上り、之が爲に暹羅王は特に白象の勳章を贈れり。後、氏は我國の風光の美なるを聞きて、筆を乘せて訪仙の客となりしが、一たび其山水を見、住民に接せるや、我理想の仙境は日本にして、我理想の佳人は日本婦人なりと爲し、千八百九十三年より同四年に亘るの間に於て、「吾妻」と云ひ、「海と陸」と云ひ、「ジャポニカ」と云ひ、「東洋と西洋」と名づくる著作は、一に日本に係らざるはなし、後國に歸りてデリーテレグラフ紙上大に自由黨と日本婦人の爲に健筆を揮ひしが、今ルーター電報は、氏の日本婦人と合巹の禮を擧げたるを報せり。氏は今年六十五歲の高齡なりといふ。

●水戸城の懷姙水　水戸城の西北隅なる土手下より湧出づる水を一年間飲料に充る時は、如何に兒なきものにても、二年目には必ず懷姙するとの說にして、彼の烈公も、之を日々の飲用水に宛たるため、五十四人の公達姫君をまうけたるなりとは、巷間傳るところなるが。維新後は、誰とて此水を飲用に充つるものなかりしに、近來最寄に住居を構ゆるもの殆んど十戸以上になり、何れも皆此水を日々の飲料になせるに、十戸とも如何なる人にても、五人以上の子をまうけぬはなしと。如何なる理ありてか、めでたき飲料水にこそ。

●紅葉の法　楓樹をして能く紅葉せしめんと欲せば、其葉を八月中に、一葉づゝ大事にむしり採るべし。然かするときは、其跡に新葉を生じて青々たり、其葉十月の末より十一月の初めに至れば、紅の色麗はしく染めわたすべしといふ。

●婦人頭髪の臭氣を除く法　婦人の頭髪は、最も大切のものにして、之を不潔になしおくは、只に人に對して無禮なるのみならず、衛生上にも宜しからぬことなり。今は、多く、香油、香水の類を用ゆれど、此迄の如く、鬢付油、種油などこちたく塗りつくるもの少しと雖、往々洗滌を怠る等より、不潔に陥りやすきものなれど、心すべきことなり。此が臭氣あるものを除くには、一週間に一度宛、重炭酸曹達、又は鶏卵にて能く洗滌し、乾きて后、香油のみにて結髪し、爾后朝夕一度宛、香水にて修飾すれば、決して惡臭を止むることなしといふ。

◉讀者諸孃につげまゐらす

彼地此地の諸孃より寄せ給へる詠草は、毎に賑はしく、これの敎の庭に生ひ茂りて、咲き競へる花の色々、いや増にさか行くこと、編者もいとゞ嬉しうなん。斯く諸方より送り給へる歌文は、毎に斯の道の大家に閲を請ひて、詞、意の足らざるを補ひ餘れるを削り、わきてめでたきは、撰り掲げて三才に配し、奬勵にもとて、聊かの賞を送りまゐらせぬ。されば、はじめの程は、拙くとも、いそしみ給へば、漸くに優りたるを詠みもし作りも出で給ふべし。大方の女子だち、拙くとて徒にな止み給ひぞ。ます〳〵勵みて、未だの女子たちも、此れの樂しきわざをよそごとに見すごし給はで、揮ひて玉稿を寄せ給へかし。さて、送らるゝ歌文、此れまで期日に遲れて、

れと思はるゝものをも、得かゝげずて、あたら沒書となすが多かり、前回などは、沒書となしたるもの、歌は百首にも餘り、文は二十章もありつらん。斯くては、れこし給ふとて、何の甲斐もなきわざなれど、必ず〆切期日までに、本社に着く樣送ることをな忘れ給ひぞ。

また、書式に違ひていと、讀み難きが多し。今よりは、書式に違ひて讀み難きは、すべて沒書とすべければ、違はざる樣心し給ひてよ。

歌書式

題　住所　姓名

……………………
……………………
……………………

用紙は半紙半枚に斷ちはなして認むべし。漢字は階書、假名は平假名にて鮮明に、一人に二首を限り認むべし。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、下句は皆假名文字若くは一音の漢字にて一字毎に離して認むべし。

文書式

題　住所　姓名

…………、…………、…………。…………、…………、…………。…………、…………、…………。

用紙は半紙形にして、字体鮮明に、句讀點を施すべし。

●女鑑月並兼題

十一月廿日	歌……落葉滿庭	文……新嘗祭	十一月十日〆切
十二月五日	歌……遠山雪	文……友人の非行を誡むる文	十一月廿五日〆切
十二月廿日	歌……田家歳暮	文……爐邊閑話	十二月五日〆切

教の庭



十一月五日兼題　深夜時雨

天

あすとはん紅葉の色のれもはれて
　ねさめ嬉しき小夜しくれかな
三重縣伊賀府中村　服部　かつみ子

地

ともし火の影もふけゆく小夜中に
　さひしさ添へてふる時雨かな
廣島市稲荷町　香川頴子

人

小夜深み見はてぬ夢のあとゝひて
　軒端をたゝくむらしくれかな
下總國猿島郡古河町字横町　中村正子

秀逸　（十五首）

闇の戸にそゝく音さへふけゆきて
　きくもさひけき小夜しくれ哉　木川里子

この頃の夜半のねさめの淋しさを
　れとつれそめしむら時雨かな　住山幾子

さらぬたに夜半の寢覺の詫しさを
　なみたそへよとふるしくれ哉　浦井とよ子 當十四年六ヶ月

夜をふかみあはれ窓うつ時雨こそ
　もらても人のそてぬらすらめ　氏家ともゑ子

ふけてぬるねやの板戸を音なふは
　木の葉ましりの時雨なりけり　名取正代子

をり〳〵は落葉の音のたくひきて
　ふけゆくよはにふるしくれ哉　田巻秀代子

さよふけて又もしくれの音すなり
　まくらの山やめくりゆくらん　屋摩高ゑけ子

木からしの風にきほひて小夜深く
　たゝくしくれの音のさひけさ　永井さい子

ものみなは静まりはつる小夜中に
　音かしましくしくれふるなり　弘田ゑも子

もの思ふみにもあらねと更る夜の
　しくれの音にそてはぬれけり　江口とみの子

木からしの音もましりて淋しきは
　更け行く夜半の時雨なりけり　戸塚てつ子

そり／＼は木の葉を誘ふ音のして
淋しき夜半にふるしくれかな　春永きよ子

木枯のれとかとさゝてさめしよの
ゆめのあとゝふむらしくれかな　濱田なほ子

さよふけて心はそさもまさりけり
木の葉をさそふ軒の時雨に　宮地こと子

さよふけて軒をすくれと門まもる
犬も去くれはとかめさりけり　上原能夫子

（以下原稿到着順）

よひのまはづこの風をすきつらん
さよふけてこそしくれきにけれ　佐々小琴子

そはたつるまくらの山におさたてて
ねやの戸たたくさよしくれかな　佐々有鄰子

木枯のさそふまに〳〵しくれきて
夜ふかきいほをなにたゝくらむ　西川順子

さよふけてさふ人もなき賤かやを
しくれてわたるおさそわひしき　中山さみ子

ものすこき冬のはしめさ小夜ふけて
しくれのあめぞたさつれにける　高橋きん子

小夜ふけてふみよむ友さたのみてし
つきかきくらしふるしくれかな　金森さし子

小夜ふけてねざめかちなる窓の外に
さひしくそゝくむらしくれかな　山手てい子

さよふけて夢たさろかすむらしぐれ
あはれ身にしむひさりねのさこ　仁保基子

さらてたにさひしきものを小夜更けて
まくらにひひくむらしくれかな　吉弘周子

さよふけてねさめにきけは村しくれ
あはれをそへてまたもふりきぬ　長山孝子

ちりのこる庭のもみちにおさつれれて
ふゆの夜ふかくしくれふるなり　田代鶴子

小夜ふけてさひしさまさる閨の戸を
たゝきかほにもしくれふるなり　田代饒子

つきかけもふけゆく窓にかけみねて
のきはを過くる小夜しくれかな　野間際子

さよふけてねさめ淋しきねやの戸に
なほ音たてゝしくれふるなり　山根久子

さらぬたにねさめ淋しきふゆの夜の
まさおさつるる小夜しくれかな　福原董子

いにしへを思ふねさめの更くるよに
おさもさひしくしくれふるなり　石川類子

君にあふうれしきゆめをさましつる
夜半のしくれなうかみこそすれ　石川樂子

あはれ〳〵ふけ行くまゝに小夜時雨
なみたそへても降りしきるかな　朝霜きみ子

月おちてふけ行くまさなこささらに
おささひしくもさふしくれかな　千代田榮子

夜はふけて時雨ふりしくあばらやを
おとなふものはたまたれのおと　田中ひろ子

なつかしとすかりし袖にゆめさめて
ふりしむかしをしのさむらさめ　綿野りき子

むら時雨あくるも待たでたゝくなり
ひとはゆめ路をたとりつる間に　小松不士子

さよふけて時雨ふるなりもみち葉を
ひとの見ぬまにそめんとやする　酉つや子

ひとりねのこゝろ淋しきさよ中に
絶えすおとしてふるしくれかな　酒井美佐子

こよひこそ月てらさめとおもひしに
またもしくれのおとそきこゆる　生熊つれ子

さらぬたにねさめかちなる冬の夜に
あはれをさそふむらしくれかな　榊原八千代子

ふくる夜のまくらにきけは中なかに
しくれのおとそさひしかりける　小野寺竹子

さらてたに淋しきものをさよ更けて
ねやのいたとにしくれふるなり　中山嘉壽子

誰かさゝを廻りきぬらんわひひとの
そてぬらせとや夜半のしくれの　氏家はな子

夜あらしにふりも定めすしつか家に
しつくのこしてゆくしくれかな　氏家きく子

ふくる夜にねやの板戸をもるつきの
かけにともなふむらしくれかな　宮澤その子

さやけさにてる月かけのくもるかと
見れははれゆくむらしくれかな　宮澤たけ子

人目かるあさちかやとをとふものは
よはのしくれに散るもみちなり　美奈井芳子

いくたひか夜半の時雨にさそはれて
更けゆくまゝにそてぬらしけり　竹村てい子

ふくる夜のねさめに聞けは我か庭の
もみち葉散らすしくれふるなり　水上浪子

小夜ふけて庭のおち葉を吹くかせの
手まくらさむくしくれふるなり　杉浦よし子

さらてたにさひしきこころはぬは玉の
よはのしくれそあはれなりける　右田藤子

小夜ふけてふる音たかくいくたひか
夢おとろかすむらしくれかな　河田いし子

ふくるよにあはれと聞きし鹿のねは
たえてしくれのおとそさひしき　河田ふく子

しつのめかきぬたの音もうちたえて
さひしきよ半にしくれふるなり　松尾蘆子

冬の夜のふけゆくまゝにねさめして
のきのしつくにしくれをそしる　今村頼子

風ませにいくたひとなくはら〳〵と
夜半のねさめをとふしくれかな　赤沼香以子

いきくらし獨りねさむる小夜なかに
なほそてぬらすむらしくれかな　坂田きみ子

ねさめしてまくらさびしき一人ねの
夢のひまさふさよしくれかな　菊園千代子

小夜風のふけゆくまさにかけ見ねて
つきをよこきるむらしくれかな　萩園露香子

夜をこめて文を見しかなまさを打つ
しくれの音にめをさましつゝ　及川千ひろ子

ゆめさめてきくこそいさゝさびしけれ
夜半のしくれのおさはかりして　磯野たま子

ふけわたり落葉のおさにひきかへて
いつかのきはにしくれふるなり　磯野こさ子

木のは散る音かさはかりおさろきて
ねさめて見ればしくれなりけり　春野椛子

ねむられぬしつけきよはの園りさを
まなくたゝくはしくれなりけり　富士村茂子

ふりしきるしくれのあめにゆめさめて
むかしをおもふゝはのしつけさ　富士村ひさ子

小夜ふけて窓のくれたけそよ〳〵と
さやけるおさはしくれなりけり　仁保しま子

風そよくおさかあらぬかくれたけの
夜ふかくすくるむらしくれかな　三浦鴫子

あくるよもまたてほさなくなる月を
かきくらしてもふるしくれかな　吉村ふて子

さゝなかの夢のなかはをやふれるは
あらしにきほふしくれなりけり　德永萬壽子

さなきたに手枕さむくおもひつゝ
ねろよふかくもしくれふりさぬ　土岐よね子

小夜深みもののあやめはわかれさも
まさうつおさやしくれなるらむ　弘田ゆき子

虫の音もしつみてふくるねやの戸に
おさつれそむるむらしくれかな　日吉あさ子

風はやみ夜ふかにのきをおさつれて
木のそはましりにしくれふるなり　中桐杏子

さよふけて聞くもさひしきむらしくれ
ねさめの床もつゆけかりけり　澁谷富子

小夜ふかみ枕にひゝくたまみつの
おさはしくれのつたふなりけり　諸井久眞子

ちりのこる桐のかれ葉にはら〳〵と
夜半のしくれのおさそさびしき　吾妻近子

よひの間は月さみつるを小夜更けて
のきにしくれのおさそきこゆる　館脇ます子

はら〳〵と板家をたゝくおさはして
夢おさろかす小夜しくれかな　萩原章子

いねかてにむすふまもなき手枕の
ゆめおさろかすさ夜しくれかな　寺田まさ子

よむふみを照せるつきのかけきこね
やかておさなふはつしくれかな　椋園ふみ子

すきまもる夜風もさむく身にしみて
ねさめさひしくしくれふるなり　白井さな子

夜半に聞くしくれのおとにおもふ哉
　あけなはそめんにはのもみちは　たつよ子

さよふけて軒のつま戸をおとなふは
　もみちを染むるしくれなりけり　さなみ子

なりにあひてかなたさそふる小夜時雨
　むかしをしのふ老いのねさめに　中川須枝子

ひさしきり又しくるなりさらぬたに
　ねさめかちなるよはのさほそに　錦小路鈺子

さよふけて友らかへりししはの戸を
　おとなふものはしくれなりけり　日高かず子

閨の戸にさそふしくれの淋しくて
　かたしくそてもそほちけるかな　岡澤りん子

ふけぬるかまさにおちくる月かけの
　あさしくれゆくおとのさひしさ　梶井久子

槇の　にそゝくしくれにゆめさめぬ
　いりあひそらはすみわたりしに　林常子

ねや柴戸を打ちししくれは過きゆけと
　むねのおもひの晴れぬ夜半かな　成田さめ子

わひ住のねさめをさきとおとつれて
　なくするめかほのさよしくれかな　下元茂登子

さよ深くねさめの床におとつれて
　なくさめかほにふるしくれかな　白石梅子

よひのまの高ねに見えし白くもや
　さよふけてふるしくれなるらん　堀利恵子

さよふけて閨のさたゝくおとすなり
　あられましりのしくれなくらむ　近藤よし子

人めさへくささへかれしやまのいほを
　よふけてたゝく村しくれかな　宇高松子

よひの間にさわきし雲のかへり來て
　ゆめおとろかすさよしくれかな　野中あさ子

とふ人もなき小夜なかに音つれて
　降りくるものはしくれなりけり　重松たか子

神無月しくれぬ夜半はなかりけり
　ふるさとこふるひとのなみたか　内藤さよ子

小夜あらしふきのまに／＼時雨きて
　わかふるさとのゆめもみたれつ　内藤ちよ子

ふるさとの事を思ひてねし夜半の
　ゆめおとろかすむらしくれかな　内藤さた子

里の子かわらうつつちのおとふけて
　さひしき夜半にふるしくれかな　内藤あや子

こからしの時雨をこふこゑならし
　ふけ行くまゝにゆめもやふれぬ　與田さし子

雲まよふたかねおろしのすゑなれや
　よも更けぬるにいたくしくるゝ　宮原ゑく子

長き夜もいまやあけぬといくそたひ
　ねさめのとこにしくれをそきく　内田つる子

小夜更けてたゝくしくれの音きけは
　ねやのまくらもぬれまさりけり　内田さし子

小夜更けてねられぬものを又さらは
　　ものおもへとてしくれふるらん　　内田はつ子

病みやせし母にかしつく此の身には
　　夜半のしくれのいゝさかなしき　　畝山ちゑ子

ひるたにもことふ人たになしはのさな
　　よふけてたゝくむらしくれかな　　林　久子

はるゝかと見れはしくれてむら雲の
　　ゆくへさためす更くる夜半かな　　窪野静子

秋のよのふけゆくまゝにねさめせは
　　もみちをさそふしくれ降るなり　　北村てい子

ふくるよにゆめにそきゝしむら時雨
　　のきのしつくのいふかしきかな　　北村左枝子

さらぬたに露けきものを小夜更けて
　　ねやの月いたにしぐれふりつゝ　　楠　花雄子

ひとりねのねさめさひしきさよ中に
　　みにしみ〳〵としくれ降るなり　　村松みち子

まつかせの音と思ひてめさむれは
　　あはれにきこゆ小夜しくれかな　　山田かれ子

小よふけてさはくからすの聲すなり
　　ねくらのまつに古くれふるらし　　小野田のふ子

十一月五日兼題　長く病み臥せる人に寄す

天　　東京麴町區元園町一丁目六番地　白井とな子

いつかとのみ待ち暮し侍りつるを、快き方にもむかひ給はて、月頃を經給へる事、いとゞ心くるしき限りになん、此頃の雨かちなる折から、ことなき身にもれはゆるいふせさを、いかにればしめすらん、此菊の花は、已か心をつくして手入れせしものに侍れは、御こゝろをなぐさめ給はんすへにもと、二三枝折りてまゐらするになん。御養生れこたり給はで、一日もはやう本に復らせ給はん事を、切に祈りまつるになん。かしこ。

地　　陸前國桃生郡寺崎　及川千尋子

さなきだに、旅はものうきならひなるに、いにし春、杖とも柱とも頼みまゐらせし御身の、心地例ならずとて、歸鄕し給ひしよりこの方、妾の心細さ、一しほになん。さては雨風につけて、心にかゝらぬ折侍らねど、學の庭の事しげきにまぎれて、御消息も、絶ゆ間がちにのみ侍りしに、御なやみいまだ怠らせ給はぬよし、初かりの御言つてに承り、何のわやめもわかず、驚かれ侍りてなん。いとゞ身の怠の、思ひ知られて、罪さり所なう、畏う思ひ給ふる。さても

人にすぐれし才をもたまひながら、長き月日をいたつらに、病の床にわかし暮し給ふ御心、推し量りまゐらするも、いたはしうこそ。されど、何かは。若く盛なる御身なるものを、やがて秋立ち涼しうなりたらんには、御心地さわやぎ給ひて、今を昔に語りなぐさみ給はんこと、よもたがひ侍らじ。妾も、その折は、蓬生の宿に歸り參るべけれど、親しう御前に侍りて、よろづきこえ上ぐべくなん。かしこ。

人

筑後國浮羽郡浮羽村　山手てい子

去ぬるころに尋ねはべりし後は、日ごとに事のみ繁くて心ならずもとほ〴〵しう打ちすぎはべりしに、其まゝさして變りもあらせたまはぬ様もれきゝ、少しはこゝろやすまりはべりぬ、彼のまゝにてあとにかへる様のことだにあらせられずとも、もはや御本復も近からんと、くすしの君の御話しさへはべりしほどなれど、つとめて御心丈夫にもたせたまへや、わきて秋の客としいへど、なやみなきたゞ人さへ打ち去づまるゝならひなるを、久しく病の床におはしては御心弱うもれはさるべけれど、病は大方こゝろからこそ、かろらかにも、はたおも〳〵しうもなるものにはべれど、つとめても御心つようもたせたまひ、一日もはやう癒えさせたまひてよ。そをまつものは妾のみかは、御母君の御胸にはその御願ひのみぞ滿ちわたりぬらん、妾こたびはやむことなき事のはべりて得來らねど、つぎのやすみには、めづらしき物がたりをもあまたあつめ置きて伺ひまつるべくなん。かしこ。

（以下原稿到着順）

高橋きん子

此のほどは、久々うちたえ、うちくして、何の文をもまゐらせざりし、罪ゆるし賜へかし。思ひ出せば、すぎし夏の夜、螢狩の時あひにしより、きのふと暮らしけふとくれ、げに月日は流るゝ水の如く、はや神無月となりて、ふりみふらずみ定めなき、冬のはしめのあるしさて、去くろゝ空の物すごきに、峰の木枯ふきそひて、紅葉ちり來るうきをりにいかゞわたらせたまひぬらん、さいつ頃、ふと、人つてに聞き侍りしに、あなたには、長きいたづきに臥したまへるよし、ひたすら驚きて、御煩のほど推し量り侍りぬ、このごろは、病み怠り、快くわたらせらるゝか、伺ひ上げたく、まはらぬ筆もてうかゞひまつりまた参らしかられさ、この蒸菓子一篋すゝめまゐらするになん。かしこ。

鯉部嘉子

先日御尋申上候後、御容體は如何に候哉、其後折々御見舞申上ぐべき筈ながら、御存じの通り、年中忙き家業にて、少しも落付きたる

暇御座なく、誠に心にかゝりながら御無沙汰に相成り申候、もさより御看病も御醫者も行屆き候事故、此上御不足は御座なく候間近きに御本復遊ばざるべく存候へども、なほ一しほ御養生遊ばされたく念じ上げ候、御菓子一折御薬受に進じ申候是は玉子と牛乳とにて製し候ものゆゑ、御滋養にも相成り申すべくと作候、何れ遠からず御うかゞひ申上べく候へ共先は御無音御わびかた〴〵右申上候かしこ。

田中ひろ子

其後は絶ねて、御無沙汰に打すぎ、いみじう申譯もなうこそ、さて、此兩三日は、空合なにとなう、さだかならず、やう氣も、つゞきて不順に侍れど、御許様には、今日此頃の御容體は、いかゞあらせ給ふにか、心もとなくこそ、妾今朝御訪れ申さばやと、仕度とゝのひつる間もあらせず、ふと、胸の痛みをおぼへ、からうじて、已れの居間に立ちもどり、思ひまうけし心の程は、葉末の露ときえうせて。いと〳〵口惜しきかぎりにこそ、されば、本意ならねど拙き文もて問ひまゐらするをあしからず、おぼしてよ。またしも早く全快し侍らむには、直に、さぶらひて、御様子伺ふべけれど、取急ぎ、かくは問ねつゝ、何事も無禮の程は、更にみゆるし給ひてよ。あなかしこ。

緒野りき子

時雨がちなる空のけしき、慈なきものすら、物うく徒然に侍るを、まいていたつきの御床に日をへ給ふ君には、如何にこそ、御わづらはしくやおぼすらん、扨て、おのが高祖父白菊をわきて好みて、うつし植ゑ置れしとやらんにて、今も猶、くる秋毎に香を忘れず咲き出で侍るに、ことしは去にしあらしに吹き折られ、かたちはかりも残らざりしに、心をつくしししるしにそ、哀れなる中に生ひ立ち、昨日今日珍らかにも、莟近くさきそめ侍りぬ、あやしき賤の垣根のものながら、いとめでたき心地しはべり、やみおはする君に先づみせばやと思いとりしを花も御枕もとちかうながめ給はらばいかばかり嬉しき事ならんと、二枝三枝をりそへ、送りまゐらするになん、いつれ午の時すごしなばまゐ出でて、よろづみけしき伺ひまつるべくなん。あなかしこ。

四[illegible]子

程たゝぬ間に又伺ひ侍らんと、契り置き参らせながら、何かとなす事にのみ追はれ〳〵て、心ならずも今日迄、御見舞怠り侍りつ、愚かし情なき者とうらみ思そらんと、いと面伏に存候、此程御もよりの人参られ、御様子承り侍れは、此頃は日一日と、御元に復せらせ給ひ、御面色も、よ程宜しとの事、いと〳〵嬉しく存じ候、こも、偏へに、常々の御養ひの行き屆かせ給ふと、くすしのいさをの、あらはれ初めしならん、なほ此上にも、御養ひ怠り給はで、一日も早く御床はなれ給ふやう神かけて祈り上げ参らせ候、さりながら、久しき御床籠り、殊に、秋と申さは昔より、わびしき物の始に数へられし事とて、あはれ知らぬ身にも、何となうもの淋しき心地致し侍るを、さぞ〳〵御徒然に渉らせ給ふらん、なにをがな、御慰めにも成るものをと、これかれ撰り候うち、ふと思い付き、かねてかゝるもの、いたく愛でさせ給ふよし、承り侍れば、取敢へずをちこちの名所古跡の寫眞、とり集め、人して持せ上げ奉るになん、御こゝろよき折々御覧下されたく、また近き中参り侍りて、よろつ問ね上ぐべくなむ、あなかしこ。

東野けい子

空の氣色も時雨勝にて、紅葉のかつ〳〵散り初むるなど、よろづ物淋しきに、久しう音づれ給はぬより、たひれの便りなけなる疑も一入耳にさまり、此頃はいかに渡らせ給ふらんと、思ひつらひ侍りしに、けふ友のとひ來て、さいつ頃より例ならずなやませ給ふと始めて承り侍りぬ、さくより知らましかはとふらひ參らせんものをと、心もとなうこそ、日頃御身は衛生に御心をよせ給ひて、いと清閑なる地を撰び、ゆるやかに住みなし給ひ、何くれと萬に御心用ひさせ給へば、日ならずをこたらせ給ふらんと、心のどかに思ひ給ふれど、尚御心を用ひ給へや、生憎なる事ども出て來侍りねまうのほらぬも、心くるしうなん。かしこ。

中村正子

人目も草もかれはてゝ、蓬生の門おく深う、冬ごもりぬるさびしさにつけても、御戀しさのみいやまさりて、やる方なくなん、去にし頃よりの御いたづき、月日經ても、はか〴〵しうさわやぎ給はぬよし、いかにみ心ぼそうのみおはすらん、御見舞をだにまゐらせでうちたえぬる怠り、さり所なくなん、もとよりさせる御事ならねど、追々寒さ堪へ難うなりて、身にしむ霜風も、吹きそめんを、御心厚く養はせ給ひて一日も早う心地よくならせ給へ、千代もと祈る君が爲、朝夕そが方樣にのみ思ひ渡りてなん、此頃、とおるすさびに詠み出でし腰折數首、をこがましけれど、御病なりと忘れさせ給はん料にと、御覽ぜさするを、笑ひぐさともなりなんこそ中々に本意なりけれ。いづれ其うちおとづれ侍らんを、必ずみ心地よくならせ給ひて、籬の梅の色香ふかく、咲き匂ひ給へや。穴賢。

佐々有鄰子

大汝少彦名の神の御代に、病をいゆすべき藥の道はひらけしものから、今の世のうつしき青人草のうきせに落ちてわづらひなやむも、それぞれの藥師のわざひらけて、大和法はいと賢く、漢法も西洋法もとりどりなれば、秋の夜の長きに病にふしたまふとも、おこたりなく治療をくはへ玉はば、とみに起き出でたまふべく、茸狩に紅葉狩に、はやはやもろともに手とりかはし、御供つかへまつらん、あなかしこ、氣をもみたまはずに、治めたまへ療たまへ、中かきのへだてなきうるはしき睦の御もと。

有田藤子

月日の過ぎゆく事ははやきものにて、ことしも秋の殘りすくなうなりぬる頃、いまだに長々の御いたづきいえさせ給はぬ由、さぞ〳〵御心苦しくおはしますらんと、かげ乍ら推し奉るになん。御身御保養は申すまでもあらせ給はねど、かくも長き病の御とこに臥させ給ひては、かへりて惡しくあらせられんと存じ奉るにより、いとなめげながら、御入湯を遊ばしてはいかにか、御見舞かた〴〵文もて御進めまつるになん。かしこ。

名取正代子

其後は、いかに渡らせ給ふらん、御わづらひも少しはおこたらせ給ひつるか。いかに〳〵とおもひ給へながら、世の事はざしげきに取りまぎれ、久う怠り侍りつるつみ、ゆるし給ひてよ。いかに此程は御食氣も少しはすゝみ給ひつや、つれ〴〵好み給ふものも、御病の中は、にがみ給ふが多かり。されば、何か、よけんと、いろ〳〵あんじ侍りつれど、べちに、これぞと思ふものも侍らず、たゞ此ビス

ケツト、いさゝかまゐらせ侍れば、御母にさひて、めし給ひてよ、なほ此還之内は、御伽の方にまゐらせたくなん、いづれ、あすか、あさての程にも、御枕べ近うまゐのぼりてこそ。かしこ。

安井うめ子

過ぐる日、はこ遙の松の下にてはなれぬ袖を引きはなち、あなた此方に別れしより、心は片ときも御そばをはなれず、今日のあつさやいかならん、今宵の月やいかならん、この清き月にむかひて學びの道をやいそしみ給ふらん、など思ひ居りしに、先つ頃より病の床に打ふしたまひぬとか、さらでだになれぬ旅ればかなしきに、まだ久しくもすみたまはぬ他郷の病の身、いかに心細くおはすらん、くすしはたれにか、名におふ都の事なれば、名高き醫師も數多くおはすらんを、少しは心安く思ひ侍り、されどくすしの言の葉はよく守りたまへ、病の中は食物こそ大切なれ、不消化物などめさぬ樣、能く〳〵心をつけられよ、道のり近き所ならましかば、ふつゝかながら御側にはべらましものを、いふかひなき女の身をいかゞはせん、かく思ひめぐらせば、胸の思ひはやるせなくこそ。あはれ朝夕まくらべに侍りて、いたはるは、いかなる人ぞ。やさしさはいへあだし人なれば、心置き給ふ事もあらんを、御いたづきにうまいもなり給はで永き夜すがらかりがねきり〳〵すなきゝ、ねやにさし入る月影を見ては、いかにあはれと忍び給ふらん。あはれかゝる事のありと知りなば、別るゝきはになどかとめざりけん。いな〳〵姉上には、世の常ならぬ望をいだかれ、遠き都の文の林に入りたまふを、とゞめ參らせていかにせん。かねてすこやかにおはする身なれば、いかなるいたつきにかゝらるとも、いかで忘らぬ事やはある。さるを妾のせまき心より益なきくり事をならべたるおろかさよ、ゆるし給へよ姉の君。ふる里なる父上も母上も、いとすこやかにおはすぞかし案じ給はず心丈夫に養生し、とく全快し給ひて、はやく目的を遂げられよ。かへす〳〵も醫師の言の葉にそむき給はず、よろづに心を注け給へよかし。あなかしこ。

吉村ふて子

おのれ家の事のいそがはしうて、久しう師の君がり音つれ侍らざりしを、けふいさゝかいとまありて侍らひしに、四方山の御ものがたりの中に、ふと君の久しう音つれ玉はぬを師の君も心もとながり給ひしに、かたへの友の、さいつ頃よりいたつき打ふし玉ふよしかたはらるゝに打おどろき侍りぬ、ひごろははらからにもましてまじはり侍りながら、此ごろのいそがはしさにとふらひ奉らざりし心うさよ、直に參らひ侍るべきを、をりあしう客人の侍るよしにて、宿よりよびにきたりしかばえまうで侍らずなん、あすはかならずとおもひ侍れど、まづかくなむ。あなかしこ。

江口さみの子

いと〳〵はだ寒うなりしを、なが〳〵の御なやみいかに親君がた御心いため玉ふらん、されど、さいつ頃よりは、おものなどもきこしめすよし、やがてさわやがせ給ふらん、あまりに御心つかひせさせ玉ひて母君さへわつらはせ玉はぬやう、くれ〳〵も祈り奉るになん。これは延齡の露とかいふ菓にて、御やしなひに宜しき由に侍ればまゐらす。おのれもあすあさてにはまうのぼりて、御けしき伺ひまつるべくなん。あなかしこ。

弘田ゆき子

雁がね共におちくる御玉章、なつかしうくりひらき見れば、過ぎし頃より、いたづかせ給へりとか、御つれづれの程おしはかられ侍り、今少し御住居程近かりせば、朝夕にまうのぼりて、慰め參らせむものをとこそ思はれ侍れ、日にけに寒さに向ひ侍れば、殊更に深ういとほせ給ひてよ。是の繪草紙何の見處も侍らされど、御寐覺の折の御まぎらはしぐさにもとてなむ。かしこ。

海山のへだてしなくば朝な夕な
　きみが床の邊にはましものを

降田槇子

御そばにまゐりて、さぶらひ、まゐらせまほしけれど、海山遠く隔たり侍れば、如何ともせんすべなきまゝ、例のまはらぬ筆もて、御けしき、うかがひまつるになん。さても君には、過つる頃よりの御いたづき、未だ怠り玉はで、ひきつゞき打臥させ玉ふとか、長々の御なやみ、御くるしみのほども、さこそと、推しはかり侍りぬ、醫師は何と申し侍るにか、御食事は如何にか、日あし短かき秋の日なれど、ひねもす御病の床に、いらせ給ひては、嘸御つれ〳〵にや、おはしますらん、ひたすら御心用ゐさせ玉ひて、とくよきに向はせ玉はんことを、神かけてねぎまつるになん。別封新刊の冊物、をかしきふしの多く、徒然なぐさむるには、こよなきものの機悦ぬ侍れば、小包郵便もて、送りまゐらするを、御心の向はせ玉ふをり〳〵開き玉ひて、しづが心のはしなくみ玉はゞいとうれしうこそ。

岡澤りん子

龍田姫がおりなして、賤が伏屋まで粧ふなる紅葉は、足引の山の何所にも、錦の戸ばりせし樣にて、いといたう艶に、朝夕の深霧を拂ふ秋風の、寒き心地すなるに、門邊の小田に置く霜の、雪にしまがふ此頃、いたづき給ふ姉君の、如何あらんと、心に掛らぬ日とてもなし、そもくすしの仰には、常より學びの道にいそしみ給ふが、いたづきの基となりて、終には師の病ともなりけるに、日ごろたらちねの母君に、けう盡し給ふ御心の深さに、病重りては、如何計り母君の御心痛ましめ給はんなど、心遣ひし給ふ事の、今はなか〳〵病の重る種ともなりなん、さはあれど、此の月に入りては、日にましおこたりぬれば、今より一月余りも經たらんには、庭におり立ち、殘の菊などつみ給ふやうになり給はんと、承りしこそ嬉しけれ、さてもかくても、御心ゆるやかにつくろひ給へかし。文にそへる籠の卵は、わざと新しきを撰り調へ、用ひ給はば、上なく嬉しき事になん。あなかしこ。

なほ寒さのいやまさり侍らんを、幾重にも心し給ひれ。あなかしこ。

梶井久子

御なやみの永きにつけてか、此頃はいたっ御心よわくならせ給ひ、此世をうきものにおぼしなし、人にも見ぬたまはず、よろづ沈みがちにのみおはしますと、人の噂しけるこそ、いみじうおぼつかなけれ。されど、すべて病は心よりとこそ、古人も申しつれば、御心よわくては、如何なる名醫が、いかなる良藥を施すとも、なこたるʼ事あらんやは、されば今よりかまへて御心を強く面白くもちたまへかし。眞物何かなやみなからん、日に日蝕、月に村雲、花には嵐の障りのみかは、常盤の松の緑をさへに降りかくす雪はあるものを、御心だに強からば、長き御なやみも月に障る村雲の如く、やがてひさ嵐の名

殘なくふきはらひて、くまなき影の冴わたるやうにすがすがしうなりたまはんは、まのあたりなるべし。さるをとやかく思ひくし給ふは、さらぬだに永き御なやみを、いよいよ長かれと願ひたまふが如し。訪ひまつる人にも親しき際は見ねたまへ、人々の物語は、秋の千草の色々にてざし新紙にものらぬ面白き事もあらんに、御なやみ忘れたまふほだしともなりなんには、おのづから御藥のしるしも早く、御みとりのまこともあらはれぬべし。さ、數ならぬをも省みず、よろづにまさき君に斯る言聞ね上るは、釋迦に法を說くたぐひなれど、おぼつかなさのあまり、身の程も打忘られてなむ。

大寺浪迷子

活潑なる精神は、强壯の身体にやどるとかや、實に身健やかならねば、自ら心うるさく、萬の事に甲斐なからまし、されど、君がなやませたまふは慢性の胃病にておはすとか。さらば、愈々御心ながく醫藥を用ひたまひなば、いかでおこたらざらめやは、常々さね〳〵しき君にも似ず、かくしも久しう打ふさせたまひて、御心も朽ちさせられけるにや、思ひおこせば過し如月の末つかた、野べの落草つみてんといざなひたまへるに、君がおほせのまに〳〵浮れ出で、長閑になかしきながめのあかぬものから、こん秋も諸共に千草の花見んと語らひおきしを、われもまた忘れもやらず、來なれにしつばめはゆきて、雁の來つ、今は秋さへ暮なんに、ゆくりなくも御身にはいにしみな月の頃より、引つゞきすぐれさせたまはぬぞ、いと〳〵わびしきことなる。如何で御心雄々敷くはた輕氣に持ち給ひて、病勢に打勝たせられ、頓て冬にもなりぬれば、雪はふるともいたつきはうちとけたまふ御顏の、久々にて物しまゐらせたう、これのみ只管待侍るなり。日頃うくおはす御親達をはしめ、かげながらあんじ參らする我身をも、こゝろやすからしめたまひてよと、祈り侍るになむ。かしこ。

林久子

承れは、久しう病の床に打臥させ給ふとか、近き頃は柴の戸をおとなはせ給はぬかななどはいひ侍りしも、かくよそ〳〵しう打すき侍りしに、さり所なうこそ、かねて健やかなるをほこらせ給ひしほどなれは、遠からずさわやかせ給はんとは思ひ侍れど、御みつからもよくやしなひ愈たらせ給ふなよ、又去年の秋千代もと契らせ給ひし宿の菊今年は一しほうるはしう咲初て色をも香をも知る人ぞと待顔なるもあはれにくれは鉢にうつし植て送りまゐらす、あはれ此菊の咲揃ひなんころには、みこゝちなほらせ給ひて、渡らせ給はん事を祈り奉るになん。あなかしこ。

述懷　西川順子

あさなゆふなこゝろの駒にむちうてと
　すゝまぬ身こそかなしかりけれ

節儉　仝

玉くしげかけこのちりのつもりつゝ
　やかてたかしのやまとなるらむ

閑居秋夕　秋園露子

よの中のうきをはなれしいほなれと
　秋のゆふへはそてそぬれける

虫　福原菫子

秋くれはにはもまかきもしかすかに
あはれもよほすむしのこゑ〳〵

同窓の友にわかるゝに　矢島ねい子

白くもの八重たつをちにわかるとも
ともにまなひしにはなわすれそ

小學校に行くをさなき子らを見て　仝

植ゑしよりまた程あらぬなてしこも
實をむすふへきいろそみえける

京のはらからよりおこせし文をみて　仝

折〳〵はあらそひなからはらからの
なからひはかりたのしきはなし

秋風入簾　日高かず子

玉たれのをすのうちにもをり〳〵は
身にしみわたるあきかせそ吹く

山家友來　仝

うきふしを共にせましとやまさとに
とひ來るともそうれしかりける

水川里子が安徽國吳淞に轉住するを送る歌　佐々小學子

安徽の國あかねわかれのくるしさに
さきたつものはなみたなりけり
大空をくもてにかかるはりかねの
いさのたよりをまつとこそしれ

おもひきや風のをとつれあさなゆふな
わか身のうへにまたんものとは

臺灣島の新高山の寫眞をみて　仁保甚子

あきらけき御代の光にてらされし
にひたかやまを今日みつるかな

徳永萬壽子

大君のみいつかかやくたかさこや
世にたくひなきやまをみるかな

吉弘周子

うつし給のすかたうるはし新高の
山はふしにもおとらさるらん

佐々宥鄰子

ふしかねに新高やまはたちならひ
いよいよくにのしつめとそなる

水川里子

うこきなき新たか山はこもまくら
たかさこしまのしつめなりけり

有田藤子

あたらしくわか大君につかへんと
にひたかやまのかけはみえけり

谷紅葉　美奈井芳子

茸かりにみやまのたにまわけゆけは
木々のこすゑはもみちしにけり

むかひの山田苅るを見て　仝

厂かれの落つるやまたを見わたせは
かりほすいれにあきかせそ吹く

兵士　岩本ゑい子

もののふの手にとる太刀のつかのまも
こゝろのこまのたつなゆるふな

佛國文豪ルッソオ元著
慶應義塾文學士菅緑蔭譯

兒童教育論

全壹册
定價金參拾錢
郵税金四錢

歐洲の家庭と學校を一變して其今日あるを致せる最大原因は何ぞ曰くルッソオの『エミール』即ち『兒童教育論』にあらずや『兒童教育論』は教育を誕生と共に初めて之を十四五才の兒童にまで及ぼせり其說斬新其論皆獘根を穿つ若し夫れ一家の母たるものにして一度この書を繙かむ誰か彼等が既往の無鐵砲なりしを悔ゆると同時に併せて兒童教育の良道を此書に得たるを思ふて歡喜せざるものあらむや

發行所　東京市麻布區簞笥町三十四番地　文遊堂
發賣元　東京市神田區表神保町三番地　東京堂

杉谷正隆編

家庭歌訓

修身百首

此書は古今の和歌に就き格調高遠旨趣純潔にして修身の訓誡となすべき者一百首を撰び之に詳明なる義解と假名とを附し誰人にも一讀本義を了得し易からしむ四方の淑女諸士進んで此篇を讀み德器を養ふの資となし給へかし

菊版美本 全一冊 定價金二十錢 郵税金四錢

肝付海軍大佐題辭●●小笠原海軍大尉序文及作歌——西 圭一
伊東海軍中將手翰●●木村海軍大尉校閲——野木衞佐美 合著

訂正第三版

新案

海軍遊戲法

菊版美本詳圖入 全一冊 定價金二十錢 郵税金四錢

本書は曩に同文館より刊行し大に敎育家諸君の賞賛を得忽ち再版を賣盡せり今般本社更に訂正を加へ第三版を發行す請ふ續々御注文あらんことを

三輪田眞佐子著

四版

女子處世論

菊版美本 全一冊 定價金二十錢 郵税金四錢

本書は女子の本分と共に好評を博せしもの（女子の本分第六版の賣切れ將に近きにあり本書も第三版を賣盡せり）玆に第四版を發行す未だ見ざる人至急顧て以て其良書なるを知られんことを

發行所 國光社

東京京橋區築地二丁目廿一番地 （電話本局八八八）

明治三十年十一月四日印刷
同年十一月五日發行

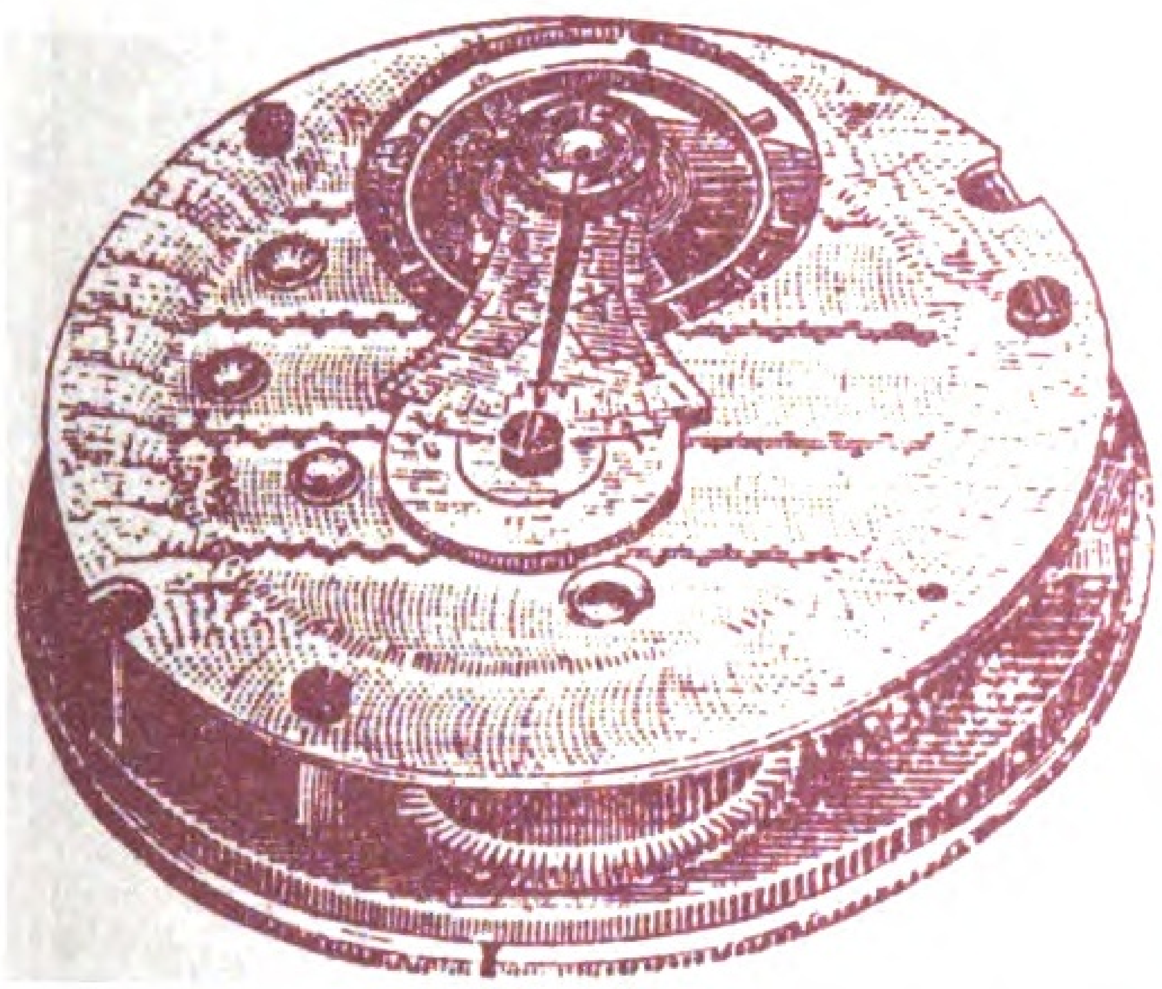
東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

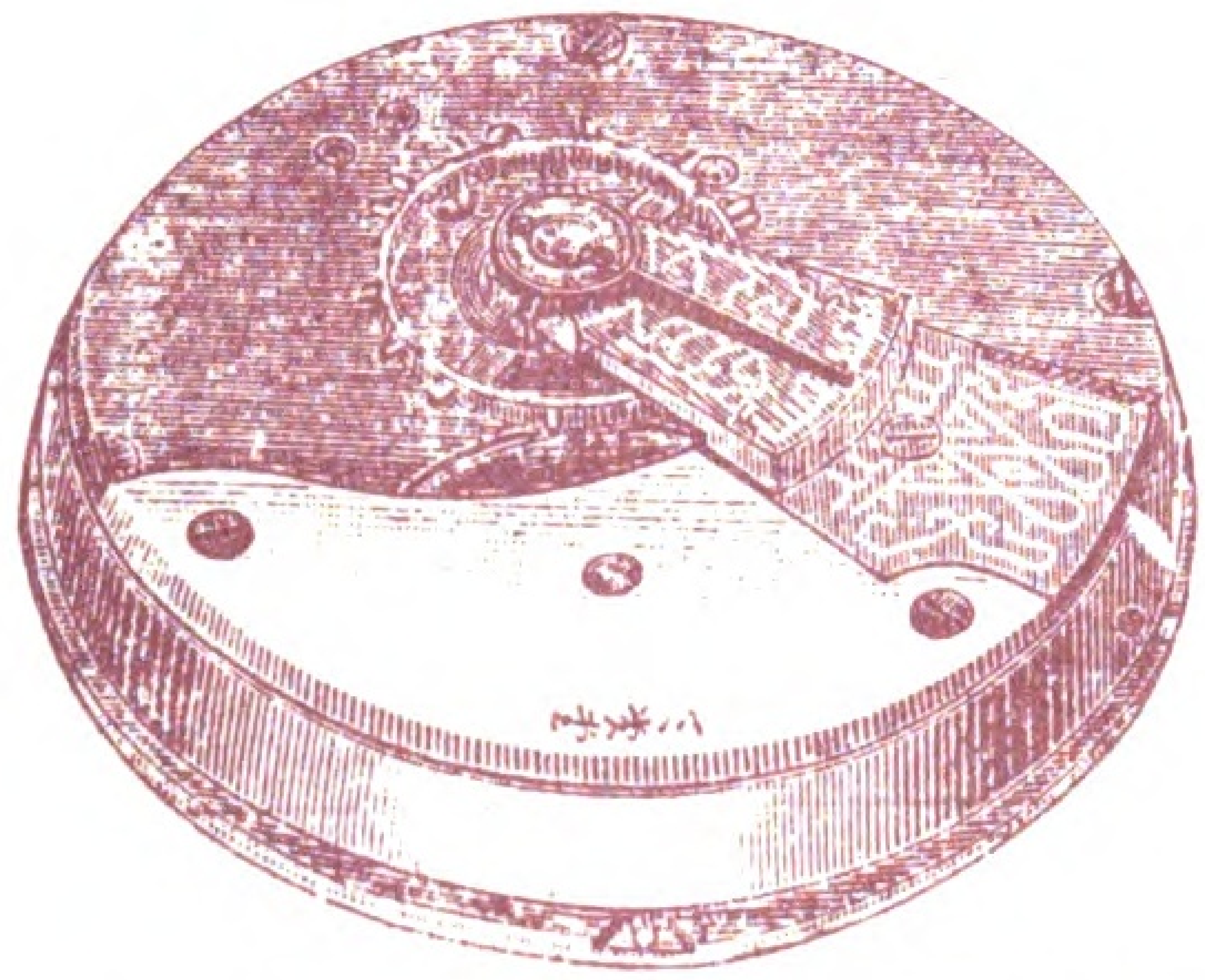
東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木良雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）國光社

（明治二十四年八月四日内務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

專賣特許安全龍頭環
米國製懷中時計





◎金側

十八金廿一形無雙中蓋付龍頭卷甲價百七十五圓●乙價百五十圓●丙價百三十五圓●丁價百二十圓●仝十四金甲價九十五圓●乙價八十五圓●仝十金甲價六十圓●乙價五十五圓●仝十八金十六形甲價八十五圓●乙價七十五圓●仝十四金甲價七十圓●乙價六十九圓

◎金着側

廿一形無雙中蓋付龍頭卷甲價五十五圓●乙價四十五圓●丙價三十八圓●丁價三十三圓●戊價二十五圓●巳價二十三圓●仝十六形甲價三十五圓●乙價三十圓●丙價二十五圓●丁價十八圓

◎銀側

廿一形無雙中蓋付龍頭卷甲價二十五圓●乙價二十圓●丙價十八圓●仝片硝子甲價十七圓半●乙價十六圓半●丙十四圓半●仝十六形無雙甲價二十圓●乙價十九圓●丙價十七圓●丁價十六圓

◎白銅側

廿一形片硝子中蓋付龍頭卷甲價十二圓半●乙價九圓●丙價八圓半●丁價七圓半●戊價六圓半

市外遞送料金廿錢

米國製時計ノ堅牢ニシテ時間ノ正確ナルハ公許ノ許ス所ナルヲ以テ此ニ其効用ヲ喋々スルノ要ナシ前記四種ノ各時計ハ近來米國ニ於テ專賣特許ヲ得タル安全龍頭環ヲ用ユ從來ノ龍頭環ハ環ノ彈力ヲ利用シ之ヲ篏入セシモノナルニヨリ容易ニ之ヲ外ス事ヲ得又自然脱出スル憂アリタルモ此安全龍頭環ノ長所ニシテ且ツ最モ高妙ナル點ハ器械ヲ以テ環ヲ緊着セシメアルニ依リ其ノ器械ノ一部ヲ外サヽレバ脱出セザルニアリ右拾ケ年ヨリ卅ケ年迄ノ保存請合證ヲ付シ發賣ス御購求後貴意ニ適セザルトキハ御望ニ應シ他品ト交換シ又ハ原價ヲ返戻スル等屢々各新聞紙ニ廣告セル弊堂店則ニ明示スル所ノ如シ



時計及寶玉類
貴金屬美術品
商
東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
天賞堂
（電話番號本局三百三十三）

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）
天賞堂小川町出張所

妙技一等賞牌

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）
天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町上通鍛冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市萬歳町上野屋方
天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色内町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

（印刷所　東京國光社印刷所）